
真剣で神の協力者になった二人

SYUN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で神の協力者になった二人

【Nコード】

N4861X

【作者名】

SYUN

【あらすじ】

人を庇って命を落とした空野マモル（主人公）と大河内アキラ。神の頼みを引き受け別の世元（平行世界）へ行く事になった。2人は、まだ17歳なので川神学園に編入して学園生活をおくる事になります。また、修行をして武闘家や魔導師の力を得ます。この作品は個性的で作者は初心者です。大河内アキラがヒロインですが「魔法先生ネギま！」のお話しはありません。遅くても1ヶ月更新するつもりです。よろしく願います。

プロローグ

〓????〓

ある部屋、2人の男女が別々のベッドで眠っている。

そのうち1人、男が目を覚ました。

？（此処は・・・医務室？）

彼は空野マモル。17歳の高校生である。

マモル（何で僕は此処に居るんだろう？ うーん、思い出せない・・・）

マモルは頭を抱えている。前あった事を思い出そうとしているのだから。暫くして、マモルは隣のベッドで寝ている女性に気が付く。

マモル（その人は何処かで会った事があるような・・・頭の上に輪があるけど）

？「・・・ん」

女性が目を覚ました。彼女は大河内アキラ。マモルと同じ年である。

マモル「目が覚めたね。気分は大丈夫ですか？」

アキラ「はい・・・大丈夫です」

アキラ（会いたかった人に似ているけど・・・そんなわけないか）

マモル「それは良かった。話の前に自己紹介しないとね。僕は空野マモルです」

アキラ「私は大河内アキラです。あの、何処かで会いませんでした？」

マモル「うん。中学の修学旅行の時、京都で会った気がするんだけど」

アキラ「あっ／＼／」

アキラ（間違いない。あの時、私を助けてくれた人だ）

アキラは頬を染めた。想い人が目の前にいるからである。

マモル「もしかして、しつこい男達に絡まれた人？」

アキラ「はい。あの時は、ありがとうございました」

アキラはベッドから降りて頭を下げた。

マモル「いえ、大河内さん。ところで頭の上にある輪は？」

アキラ「えっ、私も？ 空野さんこそ、輪がありますよ」

アキラは驚いた後、ポケットから小さい鏡を出してマモルに向ける。

マモル「あっ、本当だ・・・」

鏡を見てマモルも驚いた。

アキラ「此処は何処なのかな？ 知っている所ではないし」

マモル「うーん」

？「その事ついて、ワシが説明しよう」

マモ・アキ「!？」

謎の老人が不意に声をかけ、2人は驚く。

マモル「どちら様？」

？「ワシは神様じゃ。此処はあの世でワシの城。意味は分かるな？」

アキラ「まさか・・・私は死んだ・・・の？」

神様「その通りじゃ。マモルは子供を庇い飲酒運転トラックに轢かれた。アキラはクラスメイトを庇い召喚された悪魔の攻撃を受けた」

マモル「ちよつと待って！ 僕の方は分かったけど大河内さんの方は悪魔にだって？ どういう事？」

神様「・・・マモルは魔法の存在を知らないから当然の反応じゃな」

アキラ「うん、それが普通。私だって驚いたから」

神様は魔法について説明した。アキラは成り行きで魔法の存在を知

っている。マモルは魔法が実在していた事に衝撃的だった。

神様「本来なら閻魔宮行きじゃが、用件があってワシが引き取った」

マモル「用件？」

神様「うむ、頼みを聞いてくれぬか？ 別の世元の神から依頼があつての」

マモル「別の世元？ 平行世界の事ですか？」

神様「その通り。平行といえば、もう1人のワシが神である世元だったり、そうでもない世元だったりするのじゃ・・依頼先の世元は別の神でワシはおらぬ」

マモル「理解できました。頼みとは何ですか？」

神様「依頼先の世元の神の協力者になって欲しい。そなた達には資格がある」

アキラ「協力者って、あつちの世・・世元は大変なのですか？」

神様「依頼先の世元には“オグマ”が厄介なのじゃ」

マモル「オグマ？」

神様「世元内の各世界に災いをもたらす存在でのう。その対処に人手が足りないのじゃよ」

アキラ「事情は分かりました。でも私は強い力がありませんので・・

」

神様「その心配はない。契約が成立すれば潜在能力が上がり修業すれば強くなれる。守りたい気持ちも果たせるぞい！」

マモル「僕はどこまで出来るか分からないけど、協力させて下さい」

アキラ「私も空野さんと同じ気持ちです。お願いします」

神様「契約期間は無く神と同様になるのじゃが、それでもええかのう？」

マモ・アキ「はい！」

マモルとアキラは決意を込めて神様に答えた。

神様「そなた達の決意は、直と受け取った。今からワシが依頼先の世元へ送るからあつちの神に宜しく頼むぞい！」

神様が杖を振りかざすとマモルとアキラは光に包まれて消えた。

「あつちの世元のあの世にある????の城」

「……………」

城内の書斎でデスクワークしている青年。此処の世元の責任者ゼルスである。

ゼルス「……………」

今は黙々と仕事をしている。その時、部屋の中が異様に明るくなった。

ゼルス「!？」

ゼルスは少し驚き、周りを見回す。

マモル「神様、いきなり何を・・・え!？」

アキラ「あれ!？ 此処は何処？」

マモルとアキラも驚いて周りを見回した。その後、ゼルスと目が合う。

ゼルス「・・・・・・・・」

マモル「あの・・・まずは挨拶しませんか？」

ゼルス「そうですね。私はゼルス。此処の世元の責任者です」

アキラ「私は大河内アキラです。別の世元から来ました」

マモル「僕は空野マモルです。依頼を引き受けに来ました」

3人は、お辞儀をして挨拶した。

ゼルス「ありがとう。早速ですが、契約しましょう」

ゼルスは2人に近づき、右手を差し出す。

ゼルス「握手すれば契約は成立します」

マモル「分かりました。宜しくお願いします」

マモルはゼルスと握手する。すると、マモルの頭上の輪が消えた。

アキラ「生き返った・・・の？」

ゼルス「ええ、空野マモルは生き返りました。次は貴方です」

アキラ「はい・・・宜しくお願いします」

アキラもゼルスと握手する。そしてアキラは生き返った。

ゼルス「見た所、貴方達は高校生のようですね」

マモル「はい、高2年です」

ゼルス「ふむ、本格的な活動は卒業してからにしましょうか」

アキラ「でも、編入出来るんでしょうか？ 戸籍とか・・・」

ゼルス「戸籍は私が用意しますので、問題ありません」

マモル「何処の高校にするんですか？」

ゼルス「・・・高校は多くあるからクジで決めます」

ゼルスはクジ箱を出してクジを引く。

アキラ「結果は・・・？」

ゼルス「地球日本神奈川県川神市の私立川神学園と出ました」

マモル「どんな高校かな？」

ゼルス「武道に関わる生徒が集まる高校です。常識を超えている為、貴方達に刺激が強いかもしれませんが」

アキラ「麻帆良学園より凄そう・・・」

ゼルス「私は忙しいので編入は4月中旬になります。貴方達は私がこの時の為に造っておいた移動要塞エデンで準備しておいて下さい」

マモル「分かりました」

アキラ「その間、オグマの方は大丈夫ですか？」

ゼルス「ミッドチルダという世界に潜んでいますが、まだ活動し始めていないので様子見です。2、3年は問題ないでしょう」

アキラ「はい」

その後、ゼルスは移動要塞エデンについて簡単に説明した。

ゼルス「今から貴方達をエデンへ送ります。知りたい事があればエデンに訊いて下さいね」

マモル「はい、分かりました」

アキラ「ありがとうございます」

ゼルスは転移術でマモルとアキラをエデンへ送った。

プロローグ（後書き）

初投稿です。よろしくお願いします。

オリジナル紹介

- - - - - キャラクター紹介 - - - - -

空野マモル（主人公） メイン

外見：スバル・ナカジマにそっくりで黒髪の日本少年。体格は男らしくない。

年齢：17歳

身長：177?

性格：のんびりしていて真面目。

趣味：絵を描く・お菓子作り（甘党だから）

好きなもの：人助け・落ち着いた風景

嫌いなもの：迷惑をかける者・KY（空気を読まない者）

私立聖祥大学付属高校2年の男子学生。

大河内アキラ（「ネギま！」のキャラだけ一部オリジナル設定） メイン

外見：中等部3年より背が伸びた。髪型は変わっていない。

年齢：17歳

身長：177?

性格：落ち着いていて優しい。だけど、怒らせたら怖い。

趣味：水泳・料理（将来のため精進中）

好きなもの：人助け・小動物

嫌いなもの：迷惑をかける者・他人の悪口

麻帆良学園高等部2年の女子学生。

マザーエデン サブ

移動要塞のエデンを管理するマザーコンピュータ。エデンの心臓部でもある。本体は動けないが、分身である“エデンの民”を動かす。

ゼルスに頼まれており、マモルとアキラをサポートする。

エデンの民たち モブ

マザーエデンが操る実物ホログラムの役者で、それぞれ決まった仕事を務める。場所に合った雰囲気をつくってくれる存在。外見は人や動物など、様々である。

ゼルス サブ

神の始祖で神族を統べる王。外見は「天地無用」の津名魅にそっくりの青年で身長が180?もある。女性にみえるが性別は男でも女でもない。別の世元（平行世界）の最高責任者で、マモルとアキラの世元（元の世界）には存在していない。

怪機種 敵

オグマが生み出した無機質モンスター。姿は動物や植物や幻想など様々である。乗り物や建造物型も・・・

オグマ 敵

負が生み出した存在で、怪機種を送り出し世界を滅ぼす。外見は「クロノ・トリガー」のラヴオスに近い。

- - - - - エデンの紹介 - - - - -

<<説明>>

ゼルスが造った移動要塞。外見は一辺30?ある銀色の正八面体で外壁は宇宙一の強度を誇る。“サンクチュアリ”という兵器があつてエデンが認めないモノを絶対に通さないバリアを張る。神レベルの者しか突破不可能といえる聖域。施設が充実していて生活は困らない。

<<内部構造>>

上層・中層・下層の3段構造である。

上層

面積400平方?の正方形箱庭世界で地球内を再現した風景。太陽や月のホログラムがあつて、昼夜も再現している。レイアウトについて、北東と北西に高い山が、南東と南西に低い山が、中心に大きい湖がある。川は2本で北東と北西の高い山から湖まで伸びている。湖の周りに色々な施設が建つていて公園もあるので飽きない。

中層

上層の地下より下にあり、エデンの心臓部や駆動炉といった機関がある。

下層

広大な宇宙船ドックで、宇宙港となっている。出入り口はないが、宇宙船用転移装置がある。

<<施設案内>>

管理塔 位置：上層の湖北

管制室と会議室があつてマザーエデンと会話できる。

エデンライナー 位置：上層の湖の周り

循環する跨座式モノレールで湖北駅、湖東駅、湖南駅、湖西駅の4駅がある。車両は3両編成で2台。自動運転している。レールの高さは6m。

緑化公園 位置：上層の湖北東

緑に包まれて落ち着ける場所。春なら桜が一杯になる。

廃棄物処理所 位置：上層の湖東

ゴミなど不要な物を処理槽に入れて処理出きる。

マモルとアキラの家 位置：上層の湖東

マモルとアキラが住む大きい家。2階建てで庭が広い。2階に4室の個室があり、中は2つの八畳部屋。台所・食堂・居間・客間・洗面所・浴室も八畳で広い。台所はダイニングキッチンである。

エデンショップ 位置：上層の湖南東

中には端末と製造装置があり、端末で日用品や食材や衣服などを注文して製造装置で品物を作り出せる。地球とミッドチルダで売っている物全てあり、無料で買える。

ホテル 位置：上層の湖南東

^{ゲスト}客人を泊める所。レストランや娯楽もある。

医務所 位置：上層の湖南

怪我や病気を治す所だが、本当はマモルとアキラが死ぬダメージを受けたら強制に転移されメデイカルマシンで治療する。ドラクエ的
にいうと全滅したら教会まで飛ばされる感じ。

訓練場 位置：上層の湖南西

ドームの中は空間圧縮で直径200?もあり、シミュレータ機能で指定場所の光景を再現できる。さらに、天候や重力を変えられる。他にアリーナや室内プールや更衣室+シャワールームなどある。

下層ゲート棟 位置：上層の湖西

中に下層へ通じている門がある。

乗用車倉庫 位置：上層の湖西

車といった様々な乗り物がしまつてある場所。その製造所もある。

図書館 位置：上層の湖北西

全宇宙の情報が収められている。無限書庫もある。

研究所 位置：上層の管理塔より北

エデンショップにない特殊な物を開発・製作する。

宇宙港 位置：下層

宇宙船を停泊させる所。

上層ゲート棟 位置：下層

中に上層へ通じる門がある。

造船所 位置：下層

宇宙船を建造する所。

宇宙船用転移盤 位置：下層

転移による宇宙船の出入りをおこなう所。

禁断図書館 位置：????

超技術情報が収められている。エデンの最高機密で、転移しか入れない。

第1話 エデンへようこそ

「エデン 管理塔の管制室」

ゼルスによつて、此処に転移されたマモルとアキラ。部屋を見回した2人は驚いていた。

マモル（SFみたいだなあ・・・）

アキラ（そのスクリーン、大きい・・・）

マモル「大河内さん」

アキラ「名前でいいですよ。敬語も・・・」

マモル「分かった。僕にも名前でいいよ。アキラさん」

アキラ「うん、宜しくお願いします。マモルさん」

マモル「こちらこそ、宜しくお願いします」

2人は笑顔で握手した。

？『ようこそエデンへ』

マモ・アキ「!？」

どこからもなく声が流れた。2人は驚いて声の主を探すが誰もいない。

？『AIなので人ではありません。スクリーンに向かう形で話して下さい』

アキラ「貴方は此処の責任者ですか？」

？『はい、私はマザーエデン。マザーとお呼び下さい。創造主からの頼みでサポートしますので、宜しくお願いします』

マモル「こちらこそ宜しくお願いします」

マザー『話が長くなるでしょうから、其処の椅子にお座り下さい』

アキラ「うん」

マモルとアキラは椅子に座った。其処の間に机があり、スクリーン側に端末がある。

マザー『エデンについて説明します』

スクリーンに銀色の正八面体が映し出された。

マザー『これはエデンの全景です。創造主から聞いたと思いますが、移動要塞でオグマから各世界を守る為に宇宙を駆けまわります』

マモル「強固そうだね」

アキラ「簡単に壊れないかも・・・」

マザー『外敵から此処を守る為です。バリアもあって創造主クラス

の者しか破れません』

アキラ「それって絶対安全だね」

マモル「うん、僕もそう思う」

マザー『次はエデン内部についてです』

スクリーンにエデンの断面図が表示された。

マザー『中は上層・中層・下層の3層に分かれています』

マモル「中層って薄く空間が少ないね」

マザー『中層は、心臓部や駆動炉だけで普段、行かない所です』

アキラ「私が居る場所はどの辺りですか？」

マザー『現在位置は此处です』

スクリーンに映っている断面図の中、上層部に赤い点が表示された。

マモル「上層は空間が広いけど、どうなっているのかな？」

マザー『上層はこうなっています』

スクリーンに上層の全景が映し出される。それを見た2人は驚愕した。

マモル「これは・・・地上と同じ？」

アキラ「大きい湖があって綺麗・・・」

マザー『長い宇宙の旅になるので快適性を考え、地上を再現しています。太陽と月のホログラムで昼夜もありますよ』

マモル「す、凄いね・・・」

そして、マザーエデンは上層について色々説明した。現在居る場所は管理塔である事、他に図書館や訓練場やエデンショップ（お店）や公園など紹介された。

アキラ「服や日用品など無料で買えるなんて、凄い・・・」

マモル「うん、お金がなくても困らないね」

スクリーンの画面が切り替り、大きい家が映し出される。

マザー『これは貴方達が住む家です』

マモル「大きい家だね。これ一軒だけ？」

マザー『はい』

マモル「それってアキラさんと同居ですか？」

アキラ「あ／／／」

アキラ（マモルさんと同居・・・）

マザー『此処は私を除いて貴方達2人だけです。別居だと寂しくありませんか？』

マモル「そ、それは・・・」

アキラ「私はいいよ／＼／」

マモル「アキラさん・・・」

アキラ「家は寮並みで大きいし、部屋は別でも、安心感があって寂しくない」

マモル「そうだね。食事とか一緒なら楽しいし」

アキラ「うん」

マザー『家の中に家具や家電や日用品がありますが、消耗品や個人的な物はエデンショップで購入して下さい』

マモル「うん、分かった」

マザー『上層の紹介は以上です。下層はこうなっています』

スクリーンに空港らしきものが映し出された。

マモル「広いね。飛行機・・・いや、宇宙船が見当たらないけど」

マザー『偵察用の無人宇宙船が2隻ありますが、全てミッドチルダの周辺を巡航しています』

アキラ「・・・オグマの見張りですよね？」

マザー『はい。他に、貴方達が乗る宇宙船は造船所にあります』

マモル「でも、僕は運転出来ないよ」

マザー『大丈夫。AIを搭載してありますので命令だけで動かせる』

アキラ「よかった・・・私は動かす自信ないから」

マザー『エデンの説明は以上です。分からない事があれば遠慮なく訊いて下さい』

マモル「肝心な事を忘れてたけど、今は何月何日ですか？」

マザー『地球では2009年1月4日です』

アキラ「4年ずれてるね、お正月が終わったばかりだし」

マモル「編入予定まで3ヶ月か・・・編入試験はいつになるのかな」

マザー『川神学園ですね。編入試験は2月末にあります』

アキラ「マモルさん。受験勉強頑張ろうね」

マモル「うん」

マザー『川神市について説明しましょうか？』

マモル「お願いします」

マザー『了解しました』

スクリーンに川神市の全景が映し出された。

アキラ「大きい川・何というのかな？」

マザー『横切るように東へ流れる川は多馬川と呼ばれています。由来は江戸時代から栄えていて武家が数多くあり、馬が多かったから名付けられました』

マモル「歴史ある街なんだね」

マザー『川神学園は多馬大橋の先にあります』

マモル「あそこか・・・」

アキラ「通学する時、その大橋を渡る事になりそうだね」

マザー『多馬大橋に面白い二つ名がありますよ』

マモル「へえ。何というの？」

マザー『“変態の橋”と』

マモ・アキ「・・・・・・・・・・」

マモルとアキラは呆然としていた。

マザー『個性的な人達が多く渡るから住民達が、そう呼ばれているとか』

マモル「なるほど」

マザー『川神市で有名な所を1つ挙げます』

スクリーンに大きな寺院が映し出された。

アキラ「大きいお寺・・・」

マザー『これは武道の総本山、川神院です。気力で厄を祓うという旨で修行を積み己を高める場として有名になっています』

マモル「確かに、雰囲気を感じるよ」

マザー『因みに川神院を出た政治家が数名います。秘匿扱いですが』

アキラ「凄いな・・・」

そしてマザーエデンは川神市内の他の場所を説明する。駅周辺は娯楽施設やお店が多く並んでいたりと、離れた所に田園や重工業施設があったり多様であった。

マモル「行ってみたいな」。土手は落ち着きそうだし」

マザー『此処の生活に落ち着いたら、宇宙船で下見に行けばいいですよ』

アキラ「でも、それだと目立たないかな？」

マザー『ステルス機能があるから大丈夫です』

マモル「ミッドチルダへ向かった宇宙船も？」

マザー『はい、時空管理局に見つかると面倒ですから』

アキラ「それは警察みたいな組織ですか？」

マザー『そうですが、ただの警察ではありません。詳細は今度説明します』

マモル「えっ。何で？」

マザー『今は17時を過ぎていますし、貴方達は疲れているでしょう？』

アキラ「う、うん」

マザー『住む家は明日にして、今日はゲスト用のホテルに泊まって下さい。手配はしてあります』

マモル「ありがとう」

マザー『それと・・・貴方達に渡したい物があります』

技術者「失礼します」

白衣の男が入って来た。彼の手に2つの箱を持っている。

マモル「確か、此処に僕とアキラさんしかいないと言わなかった？」

マザー『彼は仕事をする実物ホログラムで本物ではありません』

マモル「そうなんだ。よく出来てるね」

技術者「これをどうぞ」

男はマモルとアキラに箱を手渡す。

アキラ「？　ありがとう」

マザー『箱の中に私や貴方達の連絡用携帯電話が入っています。使
い方はマニュアルでチェックして下さい』

マモル「助かるよ。ありがとう」

マザー『入り口に迎えが来ていますので、其処へ向かって下さい』

アキラ「うん、分かった」

マザー『お気をつけて。今日はお疲れ様でした』

マモル「はい、さようなら」

マモルとアキラは管理塔を後にする。南の道にリムジンがあった。

マモル「あれはリムジンだね・・・」

アキラ「うん、本物を見た事があるよ」

リムジンに近づくとタクシーみたいにドアが自動で開いた。

マモル「お先にどうぞ」

アキラ「ありがとう」

マモルはアキラの後でリムジンに乗り込む。ドアが自動で閉まり発進した。

「リムジンの中」

現在、湖沿いで南へ走行中。

アキラ「夕日が綺麗・・・」

マモル「本当だ・・・写真で残したいほど綺麗だね」

「エデン ホテルの中」

フロントでカードキーを貰い、今は客室の前にいる。

アキラ「部屋の中はどうなっているのかな？」

マモル「中を見ないと分からないよ」

カードキーでロックを解除して客室の中に入った。

マモル「ひ、広い・・・」

アキラ「部屋が2つあるね・・・」

マモルとアキラは驚いていた。客室はリビングと寝室で部屋が2つあり、バスルームも洗面所と区切りがあって広い。

マモル「スイートルームかな？　泊まった事がないけど」

アキラ「そこまでじゃないと思う。私も泊まった事がないから分からないよ」

マモル「そうだね。この40インチある薄型テレビ、放送はどうなっているのか気になるな」

2人はソファアーに座ってテレビの電源を入れる。画面に“地球”と“ミッドチルダ”の2つ選択肢が出た。

アキラ「ミッドチルダが気になるから観ようよ」

マモル「うん、僕も」

ミッドチルダにカーソルを合わせて選択した。今やってる番組はドラマのようだ。

アキラ「街並びが地球と似ているね」

マモル「そうだね。自動車も同じだし」

2人は談笑していると、テレビに臨時ニュースが流れた。

アナ『本日17時16分頃、首都クラナガンで質量兵器を持った武装グループが暴動を起こしました』

マモル「犯罪も地球と変わらないな・・・いや、酷いかも」

アキラ「・・・うん」

アナ『時空管理局の陸士108部隊は10分ほど交戦した末、犯罪者は全員逮捕されました。幸い、負傷者はいませんでした』

アキラ「よかった・・・」

マモル「アキラさん。お腹が空いたし、レストランへ行こう」

アキラ「うん」

テレビの電源を切り、2人はレストランへ向かった。

アキラ「レストランは何処にあるの？」

マモル「さっき、案内板を見たら2階にあったよ」

レストランに到着したら2人は窓側のテーブル席についた。

アキラ「夜なのに少し明るいね」

マモル「多分、月の光が少し強いからかな。今は満月だし」

ウェイター「ご注文はお決まりでしょうか？」

マモル「あ、はい」

やって来たウェイターに夕食を注文した。

アキラ「此处も全て無料だから凄いね」

マモル「正直言って、気が引ける感じがするけどね」

アキラ「うん」

マモル「お互い、よく知らないから色々話さない？ 学園生活とか」

アキラ「そうだね」

2人は、今までの生活や経験など話し合った。そして関係が深まった。

数十分後・・・

マモル「奴隷を経験したなんて・・・魔法世界は怖いね」

アキラ「大変だったけど、ネギ先生が来てくれたから何とか乗りました」

アキラ（マモルさんって絵を描くのが好きなんだ・・・今度、私にも描いてもらおうかな）

マモル「凄い人だね、ネギさんは10代前半なのに教師をやっていたそうで」

アキラ「初めて会った時はビックリしました」

マモル「確かにね。ネギさんに会ってみたいけど、もう無理か・・・」

アキラ「うん・・・ネギ先生や友達みんなも元の世元で頑張っているから私達も前向きに生きていこうよ!」

マモル「そうだね」

ウェイター「お待たせしました」

マモ・アキ「どうも」

ウェイターが料理をテーブル上に並べた。

アキラ「美味しそう・・・」

マモル「良い香りがする・・・食べようか」

マモ・アキ「いただきます」

数十分後・・・

アキラ「ごちそうさま。美味しかったね」

マモル「ごちそうさま。3つ星がつくかも知れないね」

2人は大満足であった。

ウェ이터「デザートをお持ちしました」

アキラ「ありがとう」

マモル「僕は甘いものが好きなんだ」

アキラ「甘党だね。私もだよ」

デザートを食べた後・・・

マモル「そろそろ、部屋に戻ろうか？」

アキラ「もっとマモルさんと話したいな」

マモル「まあまあ、時間は沢山あるからまた明日ね」

アキラ「うん、分かった」

2人はレストランを出て客室へ向かった。

客室の前・・・

アキラ「おやすみ。また明日ね」

マモル「うん、おやすみ」

アキラは挨拶して隣の客室へ入っていった。マモルはそれを見送った後、自分の客室へ戻った。

第1話 エデンへようこそ（後書き）

“まじこい”はプレイしたけどボリュームが凄くて、覚え切れないです。この作品に“まじこい”の各キャラクターのセリフを書く自信がありませんが精進します。
また次回！

第2話 模試は余裕!?

〽1月5日(月)〽

〽エデン ホテル〽

マモルとアキラはレストランで朝食中。気に入ったらしく、昨日と同じ窓側のテーブル席にいる。

アキラ「昨日は、よく眠れた?」

マモル「目覚めパツチリだよ。2度寝は危ないかも・・・」

アキラ「ふふつ。ベッドはフカフカして寝心地良かったから無理もないね」

2人は苦笑していた。此処のベッドは寝心地最高で油断出来ないのである。

マモル「今日の予定だけど、午前は買い物と家の荷物整理をして昼から受験勉強。これでいいかな?」

アキラ「うん、料理は出来るから私に任せて」

マモル「僕も出来るから手伝うよ」

朝食を食べた後、そのままホテルを出てエデンシヨップへ向かった。宿泊料金は無料なので精算処理はない。

「エデン エデンショップ」

到着した後、2人は中に入ったのだが・

マモル「中は研究所というかオフィスみたいでお店に見えないね・

」

アキラ「うん、品物が1つも置いていないし」

期待外れみたいで残念な気持ちであった。店内は廊下と部屋だけの造りで“食品販売室”や“日用品販売室”といったカテゴリーに分かれた部屋が多くある。

マモル「家まで運ぶ荷物が多くなりそうだから台車を買おう」

アキラ「そうだね。台車は事務用品だと思うよ」

2人は台車を買う為に事務用品販売室へ向かった。

マモル「部屋の中はパソコンのような物と大きい台だけか・」

アキラ「もしかしたら、品物を買ったあの台から出てくるのかも・

」

マモル「そんな感じがするね。やってみよう」

マモルは端末を操作し、ネット販売と同じ要領で台車を2つ購入する。するとアキラの予想通り、台から台車が2つ現れた。

アキラ「本当に此処は凄いものが多いね・・・」

マモル「驚いてもキリがないよ・・・本と書籍販売室へ行こう」

その後、本と書籍販売室へ行き教科書や問題集を購入した。

マモル「これぐらいでいいか」

アキラ「制服しか持っていないから、着替えを買おうよ」

マモル「そうだね。男女と触れないところがあるから別行動しよう」

マモルとアキラは別れて、個人で必要な物を買いに行った。

数十分後・・・

2人は食品販売室で合流する。

アキラ「私はオムライスを作るのが得意だから昼食はこれで良い？」

マモル「いいね。僕はサラダを作るよ。野菜を切るだけだけど」

献立を決めて食材を購入した。

マモル「どれも鮮度が高いな。野菜の傷とかないし」

アキラ「頑張って料理の腕を上げないと勿体ないかも・・・」

マモル「確かに・・・お互い精進しようね」

アキラ「うん！」

エデンショップを出て、家へ向かった。

「エデン マモルとアキラの家」

到着したら、食材を冷蔵庫に入れる為にキッチンへ向かった。

マモル「ダイニングキッチンか・・・キッチンも食堂も広いけど」

アキラ「掃除や手入れが大変そう・・・」

マモル「なあと、2人でやればいいさ」

2人はキッチンに対する感想を言いつつ、食材を冷蔵庫に入れた。

マモル「買って来た私物を2階の部屋へ持って行こう」

アキラ「うん」

2人は私物を持ち2階の自室へ向かっていった。

2時間後・・・

昼頃、荷物整理が終わり2人は昼食を作りキッチンへ。

マモル「アキラさん。エプロン姿が可愛いね」

アキラ「ありがとう／＼／ マモルさんも似合ってるよ」

マモル「どうも」

2人は協力して昼食を作り、食堂のテーブル上に並べた。

マモル「このオムライス、ケチャップでハート型に描いてあるね・・・」

アキラ「わ、私の気持ちだよ／＼」

マモル「それは告白になってるけど・・・」

アキラ「あう／＼／」

マモル「お、落ち着いてアキラさん」

アキラ「はい・・・」

マモル「僕もアキラさんの事が好きです」

アキラ「！」

マモル「会って間もないけど、もっと仲良くなろうね」

アキラ「う、嬉しい！」

マモル「お互い不老不死になってしまったから時間は限りなくあるし」

アキラ「永遠の愛っていうのかな・・・」

マモル「それは言葉じゃなくて現実になっていると思うよ。そろそろ食べようか。せっかく作ってくれたオムライスが冷めてしまう」

アキラ「うん、そうだね！」

昼食前なのに告白タイムになってしまった。いつか2人は恋人関係になるのだが、案外早かった。

マモ・アキ「いただきます」

アキラ「……………（↑ドキドキ）」

マモル「玉子の焼き具合が良くて美味しいよ。アキラさん」

アキラ「ありがとう」

アキラ（よ、良かったあ・・・）

マモル「・・・それにしても、この家はいいものが多いね」

アキラ「うん、自分の部屋はホテルと同じ2部屋だったり、パスルームは室内だけど露天風呂を再現してあったり」

マモル「更に、洗濯場ではクリーニングマシンがあって服や下着など入れたら3分で、しわ1つもなく洗濯と乾燥が完了するらしい」

アキラ「アイロンかけや干す手間がないから、凄い便利だね」

昼食中の会話はこの家の話題もちきりであった。

アキラ「ごちそうさま。皿洗いは私がするよ」

マモル「ごちそうさま。僕はテーブル上を片付けて勉強の準備をしておくね」

昼食を片付けた後、食堂で受験勉強をする事になった。何故、食堂なのかというとテーブルのほう勉強し易いからである。

マモル「試験範囲は高1年で習った範囲内だから、復習しようか」

アキラ「私は文学系が良くて理数系が苦手だから、理数系中心で勉強するよ」

マモル「逆だね。分からない所はお互い教え合う形でいい」

4時間ほど勉強したのだが・・・

マモル「・・・全然難しくないや」

アキラ「理数系が余裕で出来ちゃった・・・」

マモル「確認の為、模試でもする？」

アキラ「うん」

その結果・・・

マモル「全ての教科も・・・」

アキラ「間違いが1つもない・・・」

全教科満点で2人とも信じられなかった。

マモル「・・・毎朝、模試をすれば勉強しなくても編入試験は余裕じゃない?」

アキラ「そうだね・・・今は19時前だし、夕食の準備をしようよ」

勉強用具を片付けて夕食の準備をした。

マモ・アキ「いただきます」

アキラ「明日からどうする?」

マモル「うーん・・・朝は模試と買い物をして昼から修行かな」

アキラ「自己鍛錬は出来るけど実戦について、どうしたらいいか分からないよ」

マモル「平和な日常を送っていたからね。当然、僕も知らない」

アキラ「うーん、マザーと相談したらどうか?」

マモル「それしかないね」

今後について考えながら夕食を食べた。

アキラ「ごちそうさま。私は片付けと皿を洗うから、マモルさんは電話でマザーと相談お願い出来る?」

マモル「分かった。皿洗いをお願いします。ごちそうさま」

アキラは食器をまとめてキッチンへ入っていった。マモルはマザーエデンへ電話をかける。

マモル「もしもし・・・」

マザー『こちらマザー。ご用件は何でしょうか？』

マモル「明日についてだけど、昼から修行をする事になってね。それで僕とアキラさんは戦い方を知らないんだ」

マザー『了解しました。日曜日以外、訓練場で教官をつけます』

マモル「ありがとうございます。明日お願いします」

マザー『修行頑張ってくださいね』

マモル「はい」

マモルは礼を言い、電話を切る。丁度良くアキラが戻って来た。

アキラ「どうだった？」

マモル「あ、皿洗いお疲れ様。明日の昼、訓練場に教官が来るって」

アキラ「そうなんだ・・・教官ってどんな人だろう？ 厳しい人かな？」

マモル「さあ？ 明日にならないと分からないよ」

アキラ「何だか緊張してきた・・・」

マモル「アキラさん、大丈夫だよ。たとえ厳しくても2人で乗り切るう」

アキラ「うん・・・」

マモル「露天風呂でも行っておいで。疲れと緊張がとれるよ」

アキラ「分かった。先に入らせてもらうね」

マモル「うん、ごゆっくり」

第2話 模試は余裕！？（後書き）

次回は修行の話になります。

本編では2月中旬にマモルとアキラが川神市へ下見に行く予定です。
ではまた！

第3話 身体が重い？

〽1月6日（火）〽

昼過ぎ・・・

〽エデン エデンライナー湖東駅〽

此処は家の近くにあるモノレール乗り場。スポーツバッグを持った2人がいた。

アキラ「テレビで観た事があるけどモノレールに乗るのは初めて」

マモル「訓練場は湖南駅の近くだからね。歩いて行くには距離があるし」

アキラ「うん・・・あ、来たよ」

北の方からやって来たモノレールに搭乗する。モノレールは2分経った後、発車し南へ走り去った。

〽モノレール内〽

現在、湖南駅へ走行中。

マモル「電車と比べて揺れが少ないから乗り心地は悪くないな」

アキラ「車内で誰もいないと寂しいね」

「エデン 訓練場」

到着して中に入るとエントランスでゼルス？がいた。

教官「こんにちは。マモル。アキラ」

マモル「神様！？」

アキラ「！？ こんにちは。神様」

マモルとアキラは慌てて挨拶する。

教官「私は教官。創造主に似ていますがエデンの実物ホログラムです」

マモル「そう…ですか・・・」

教官「私は奥のドームで待っています。着替えたら来て下さい」

マモ・アキ「はい！」

マモルとアキラは更衣室へ行き、トレーニングウェアに着替えて奥のドームへ向かった。

ドームの中・・・

教官「まず、私の事は教官と呼ぶように！」

マモ・アキ「はい！」

教官「修行の流れについて説明します。前半は筋トレを中心とした基礎訓練。後半は術技の習得。実戦訓練はまだ行いません」

マモル「理由は何ですか？」

教官「基礎を固めるのが第一で後は、術技をある程度身に付けてからです」

アキラ「分かりました」

教官「始めに、あれを引きながら走ってもらいます」

マモル「あ、あれは・・・」

アキラ「人力車？」

教官が指差した方に人力車が2つあった。

教官「1周5キロメートルある8字のコースを2周して下さい。今回、私はマモルが引く人力車に乗ります」

マモル「は、はあ・・・」

アキラ「あはは・・・頑張ろうね」

準備運動やストレッチを終わらせた後、マモルとアキラは人力車を引いて位置につく。教官はマモル側の人力車に乗った。

教官「スタート!!」

合図と共に2人は走り出した。

1時間後・・・

マモル「ハアハア・・・」

アキラ「ハアハア・・・」

2周走り終わった2人は息を切らしていた。

教官「次は懸垂はしご渡りです」

教官がそう言うとききのコースに雲梯が出現する。

マモ・アキ「なっ!?!」

マモルとアキラは驚いて固まった。

教官「コースを1周して下さい。途中で落ちててもペナルティはありません」

マモル（し、死ぬ・・・いや、死なないか・・・）

アキラ（ハード過ぎるよ・・・）

また1時間後・・・

マモル「うゝ。指や腕が痛い・・・」

アキラ「うう・・・もしかして・・・毎日やるんですか？」

教官「ええ、勿論です」

教官は笑顔で答える。すると、2人は力が抜けて倒れた。

教官「・・・といっても日曜日は休みですよ。今から15分休憩します」

アキラ「はい・・・」

休憩に入り、教官はスポーツドリンクを2人に差し出した。

教官「これを飲んで水分を補給して下さい」

マモル「ありがとうございます・・・ゴクゴク」

アキラ「ありがとうございます・・・ゴクゴク」

15分後・・・

教官「今から術技の習得を行います。最初の課題は“気力”と“魔力”のコントロールです」

マモル「それはどんな感じですか？」

教官「体内にあるエネルギーを開放したり、抑えたり、収束したり、放出したりします」

アキラ「例えば、どんな事が出来ますか？」

教官「そうですね。まずは・・・」

教官は空中へ浮かび上がった。

マモル「と、飛んだ！？」

アキラ「そういえば、魔法使いは空を飛べた気が・・・」

教官「これは“飛翔術”と呼びます。さらに・・・」

教官は掌を上に向け、気力の光が掌の上に収束されて光弾となる。そして離れた大岩へ投げつけた。

ドォーン！！

光弾が大岩に命中して爆発した。煙が晴れると大岩は跡形もなくなっていた。

マモル「す、凄い。小学生の頃読んだ漫画の“ドラゴンボール”みたいだ・・・」

教官「今は気力を放出し、収束させた技です。魔力でも同じ事が出来ます」

アキラ「気力と魔力の違いはあるのですか？」

教官「双方扱いは同じですが、干渉し合いません」

マモル「干渉しない？　どういう意味ですか？」

教官「気力弾と魔力弾がぶつかり合おうとしても、すり抜けてしまします。もう1つ、気力で守りを強化しても魔力に対しては強化の効果ありません。逆も同じです」

アキラ「それは相打ちの危険があるかも・・・」

教官「気力の使い手と戦う場合、気力で防御し、魔力で攻撃する戦法が効果的です。気力と魔力を同時に扱えるようにしないと出来ませんが・・・」

アキラ「分かりました」

マモル「それが出来るように頑張ります！」

教官「うん、その心意気です。気力と魔力の流れを掴む為に瞑想して下さい」

マモ・アキ「はい！」

3時間後・・・

マモル「コツを掴めてきたけど、まだ難しいや・・・」

アキラ「私も・・・」

教官「今日の修行はここまで」

マモル「フウ～」

教官「帰る前に、契約で使えるようになった超能力を教えましょう」

マモル「ちょ、超能力!？」

アキラ「手を使わずに物を動かしたり、瞬間移動したりする能力ですよね？」

教官「はい。念動力、念話、瞬間移動、構造解析の4種あります」

そして教官は2人に使用方法を教えた。

教官「今の段階では役に立ちません。何度も使い込む自主トレで精進して下さい」

役に立たないというと、念動力は質量100グラムまで、念話は1メートルまで、瞬間移動は1メートルまで、構造解析は難しいので未だ出来ないのだ。

教官「念話はとても簡単なのでトレーニングすれば距離がもっと伸びます」

マモ・アキ「はい!」

教官「マモル。アキラ。お疲れ様でした。ではまた明日」

教官は挨拶した後、光となって消滅した。

アキラ「マモルさん。今日は大変だったね」

マモル「うん、疲れたから身体が重く感じるよ」

アキラ「私も同じだよ。早く家に帰って休もう」

マモル【アキラさん】

アキラ「っ!？」

マモル「念話してみたけど、届いた？」

アキラ「・・・いきなりだね」

アキラ【お返しだよ。マモルさん】

マモル「っ!？」

アキラ「私も送ってみたけど、どうだった？」

マモル「届いたよ。しかし、頭に響くなあ・・・」

アキラ「慣れようね。近距離なら便利だし」

マモル「そういえば、アキラさんは水泳部だったよね？」

アキラ「うん」

マモル「此処にプールがあるから今度、一緒に泳がない？」

アキラ「いいよ。その前に水着を買わないと」

マモル「そうだね」

アキラ「どんな水着が好みかな？」

マモル「自分に合った水着でいいよ。ビキニは勘弁したいけど・・・」

アキラ「うん、分かった」

2人は更衣室へ行き着替えた後、モノレールで家に帰った。

マモルは身体が重いと言っていたが、疲れたせいではない。エデン内の重力は1・2G（地球の1・2倍）に上がっており、今でも上昇中。その事を2人は知らない。

第3話 身体が重い？（後書き）

修行の話はまだ続きます。

本編で川神市の下見はどのようにしたいか迷っています。

ご感想ありましたら遠慮なくどうぞ。

ではまた！

第4話 バレンタインデー

（1月11日（日））

今日は修行休みなので訓練場にある室内プールで遊ぶ事になった。

「エデン 訓練場プール」

プールサイドでマモルはアキラを待っている。女子は着替えに時間が掛かるらしい。

マモル（このプール、学校より2倍あるな・・・）

アキラ「マモルさ～ん！」

水着姿のアキラがマモルの元へやって来た。

マモル「あ！ アキラさん」

アキラ「待った？ 遅くなってごめんね」

マモル「僕は着替えが早く終わったから気にしないで」

アキラ「これはどうかな？」

アキラはポーズを取ってマモルにアピールする。

マモル「すごく似合ってるよ！ 可愛いというより凛々しい感じがする」

アキラ「あ、ありがとう／＼」

アキラが着ているのは紺色スクール水着。水色のラインが入ったデザインは格好良い。説明は難しいから読者の想像に任せます。

マモル「さあプールに入ろうか」

アキラ「待つて！ たとえ遊びでも準備運動は大事だよ」

マモル「そうだった。ごめん」

アキラ「ふふつ。足がつったら言うてね」

2人は準備運動をした後、プールに入った。温水プールなので冷たくない。

マモル「向こう側まで競争しよう」

アキラ「いいよ」

競争した結果・・・

マモル「ま、負けた・・・」

アキラ「マモルさんは水泳部でもないのに速かったよ。だから気を落とさないで」

水泳部のエースだったアキラに挑むマモルは身の程知らずであった。

マモル「何度も思ったけど、2人だけじゃ寂しいな」

アキラ「川神学園で友達が出来たらエデンに誘うのはどうかな？」

「マモル、良い案だね。問題は友達にエデンの事をどう説明するか」

アキラ「うん、難しいね・・・」

「マモル、その話は置いて今は泳ごう。速く泳げるコツとか教えてくれないかな？」

アキラ「うん、分かった」

[illegible]

2月2日(月)

修行を始めてもうすぐ1ヶ月経つ。マモルとアキラは気力と魔力のコントロールをマスターした。

Ⅱ エデン 訓練場ドーム Ⅱ

教官「準備運動は終わったし、いつもの人力車引きを始めましょう」

マモル「あの〜。教官」

教官「何でしょう？ マモル」

「マモル、人力車の車輪がありませんけど……」

アキラ「代わりにソリが付いてる・・・」

今回の人力車は車輪が無くなって、代わりにソリが付いていた。

教官「貴方達は慣れてきたので更にきつくしました。タイヤ引きと
思ってください」

マモル「はあ。分かりました」

1時間後・・・

教官「懸垂はしご渡りもレベルアップです」

教官がそう言うのと螺旋状で構成された雲梯の塔が出現する。雲梯の
傾斜角度は30度。

マモ・アキ「なっ!？」

マモルとアキラは驚いて固まった。↑2回目

教官「頂上にリフトがありますので降りる時、使ってください」

アキラ「分かりました・・・」

1時間後、15分休憩も終わり・・・

教官「貴方達は気力と魔力をコントロール出来るようになりました
ね。2つ同時に操れますか？」

マモル「いえ、まだです」

教官「出来るようになったら秘術を教えます。頑張ってください」

アキラ「はい！」

2時間ほど、気力と魔力の同時コントロールの訓練を行った。

教官「残り1時間は“飛翔術”の訓練です」

マモル「どうやって空を飛びますか？」

教官「気力が魔力のどちらでもいいので全身に通して下さい。後は“飛べ”と意識するだけです」

マモルとアキラは教官の言うとおりにすると空へ飛び上がった。初めてなので動きが鈍い。

マモル「凄いやアキラさん。今飛んでる」

アキラ「マモルさんも。自分が信じられないけど夢じゃないんだね・
」

空を飛んだ2人は興奮していた。人間は空を飛びたい夢もある。それが実現出来たから無理もない。

教官「気持ちは分かりますが、訓練に集中するように！」

マモ・アキ「すみません」

苦笑した教官に叱責される2人。

教官「動きが遅いと的になってしまいますね・・速く移動出来るようにするのが今回の課題です」

マモ・アキ「はい！」

今日は次のステップに入った厳しい修行だった。

[illegible]

2月14日(土)

明日は下見で川崎市へ行く事になったので準備する為に修行は休み。

|| エデン 管理塔 ||

昼食を終えた2人は説明会の為、マザーエデンの元（管制室）にいる。

「マザー 修行の調子はどうですか？」

マモル「2月に入った途端、かなりハードだったけど今は慣れてきたよ」

マザー「そうですか・・伝えたい事があります。驚かないで下さいね」

「アキラ、どういふ事？」

マザー『現在、エデン内の重力は地球の10倍になっています』

マモ・アキ「え!？」

口を半開きして固まる2人。

マザー『結局、驚いていますね』

マモル「でも、そんなに重く感じないよ」

マザー『1月から少しずつ重力を上げてきたので貴方達は高重力に慣れています』

アキラ「うそ・・・」

マモル（前から身体が重く感じたのは疲れたせいじゃなかったのか・
・）

マザー『重力を元に戻しますね。エデン内重力1Gに変更!』

マモ・アキ「!？」

マザーエデンが眩くと、エデン内の重力が元に戻った。

マモル「か、身体が軽い」

アキラ「まるで自分の身体じゃないみたい・・・」

2人はまた驚き、困惑している。

マザー『次の話に移って良いでしょうか？』

マモル「どうぞ・・・」

スクリーンに宇宙船が映し出された。 詳細は後書きを参照。

マザー『これは宇宙船“ミカサ”です。 単独で大気圏突入や離脱が出来ますので地球へ行けます』

マモル「飛行機に似ていて格好良い宇宙船だね」

アキラ「大きいから騒音や衝撃波とか影響がありそう・・・大丈夫なの？」

マザー『大気圏内では重力制御で航行しますので住民達に迷惑をかける心配はありません』

マモル「あとは、速度に注意すれば問題ないかな？」

マザー『はい。ミカサのAIに任せたほうが安心なので、前言ったように貴方達は命令するだけで運用出来ます』

アキラ「私は運転出来ないから利用させて貰うね」

マザー『ミカサは宇宙港1番ターミナルに停泊していますので、出かける時は其処へ向かって下さい』

マモル「分かった。ありがとう」

マザー『川神市に降りる手段についてですが、ミカサにある転移装置を利用して下さい。帰りは携帯電話でミカサA Iに連絡すれば、回収してくれます』

アキラ「うん、分かった」

マモル（転移の際、住民達に見られないように気を付けないといけないな・・・）

マザー『最後に、注意しておきたい事があります』

マモ・アキ「？」

マザー『川神市内の“親不孝通り”という場所は近づかないように！』

マモル「不吉そうな地名・・・」

マザー『川神市内で治安が一番悪く、不良達が多い地域なので危険です』

アキラ「怖い・・・気を付けよう」

マザー『注意はそれだけです。明日、楽しんで下さいね』

マモ・アキ「はい！」

＝エデン マモルとアキラの家＝

夕食を食べた後、アキラは食堂を出て行った。

マモル「アキラさん？」

マモル（どうしたのかな・・・）

数分後・・・

アキラ「マモルさん！」

アキラはハート型で包装されたモノを持って戻って来た。

マモル「どうしたの？　こんなに慌てて」

アキラ「あのね・・・今日は何の日か知ってる？」

マモル「？　うん・・・今日は2月14日・・・あ！」

アキラ「気が付いた？」

マモル「今日はバレンタインデーだね？」

アキラ「うんうん。これを受け取って！」

アキラはマモルにハート型のチョコを差し出した。

マモル「ありがとう」

アキラ「私の自信作だよ」

マモル「手作りチョコかぁ。食べて良い？」

アキラ「うん」

マモルは包装を開けてチョコを口にした。

マモル「モグモグ・・・」

アキラ「・・・・・・・・（↑ドキドキ）」

マモル（甘くないなあ・・・むっ、チョコがとろけて甘みが広がっていく・・・）

マモル「美味しい！ アキラさんの想いが伝わってくるよ」

アキラ「良かった・・・」

マモル「作り方が難しそうだけど、美味しく作れたね」

アキラ「何度か失敗したよ。慣れてきて美味しく出来たんだ」

マモル「お疲れさん。ホワイトデーは期待してね」

アキラ「ありがとう。楽しみにしてるよ」

マモル「明日についてなんだけど、川神市へ行く前に寄りたい所があるんだ」

アキラ「寄りたい所？」

マモル「うん、この世元で海鳴市はもうなっているのかな」と気になるから」

アキラ「あ、私も！ 麻帆良学園都市が気になる」

マモル「明日は早めに出かけるから、今日は早く寝ようね」

アキラ「うん！ 私は皿を片付けるから、マモルさんは風呂の準備をしてね」

マモル「りょかい」

というワケで明日は川神市へ行く前に寄り道する事になった。（時間が足りないのでミカサで様子を見るだけ）

第4話 バレンタインデー（後書き）

今回は川神市の下見です。

“まじこい”のキャラを出しますので考えるのに時間がかかると思います。

なのは達の出番はまだありません。

下記は宇宙船ミカサの説明です。

宇宙船名：ミカサ

種別：万能戦艦

全長：360メ

ートル

外見は「ガンダムSEED」のミネルバに近い。船体は白で翼前部は青。

AIを搭載しており、宇宙船全体を管理している。ステルスで姿を隠せる。

動力機関はエデンと同じでエネルギーは無限。ワープ機関有り。

装甲はエデンと同じで強度は宇宙一。単独で大気圏突入・離脱が可能。

武装はあるが、収納して封印されている。

ではまた！

第5話 下見に地球へ

「2月15日（日）」

2人は朝早く家を出てモノレールに乗り湖西駅まで行った。駅近くの下層に通じるゲートをくぐって宇宙港へ行く。

「エデン 宇宙港」

マモル「・・・空港並みで広いな、此处」

アキラ「携帯電話にガイドやマップがあったから助かったね」

マモル「うん、ガイドによると1番ターミナルは左に曲がって真直ぐ進んだ先にある。其処へ向かおう」

歩いて数分、1番ターミナルに着く。窓の向こうにミカサの姿があった。

マモル「あれがミカサ・・・」

アキラ「思ったより大きい・・・」

ゼルス「おはよう。マモル。アキラ」

マモ・アキ「!? 神様!？」

ゼルス「名前で良いですよ。貴方達は私の仲間なのだから」

アキラ「はい。おはようございます」

マモル「おはようございます。どうして此処に？」

ゼルス「少し暇を頂きました。貴方達に渡したい物があります」

ゼルスは鞆から2つの財布を取り出す。2人は見覚えがあつた。

アキラ「あ、私の財布」

マモル「どうして、ゼルスさんが持っているんですか？」

ゼルス「これは、貴方達が居たあつちの世元の神から預かった物です」

アキラ「そうなんだ・・・ありがとうございます」

2人はゼルスから財布を受け取る。

ゼルス「通貨は同じなので使えます。それと・・・」

ゼルスは鞆から2枚の封筒（B5サイズ）を取り出す。

ゼルス「この中に身元証明書と通帳とハンコが入っています」

マモル「ありがとうございます。とても助かります」

2人はゼルスから封筒を受け取る。

ゼルス「地球は寒いので風邪を引かないように気を付けて下さいね」

アキラ「はい。分かっています」

ゼルス「私は冥府（あの世）に戻ります。ではまた」

ゼルスは転移術で帰って行った。

マモル「さあ、行こうか」

アキラ「うん」

2人は搭乗橋を通してミカサに搭乗する。

「ミカサ 中央ロビー」

マモル「外側は窓があまり無かったのに、中は窓が多いね」

アキラ「外が見えるから良いんじゃないかな」

船内の半分以上、客船と同じ造りで側面部には窓が多い。表は装甲で覆われているが、中からは装甲を透過して外が見える。

マモル「とりあえず、操舵室へ・・・」

ピーピーピー

マモルが言いかけた時、携帯電話が鳴った。

マモル「？ 誰かな？」

マモルは電話を繋げる。

ミカサ『こちらミカサ。目的場所の指示をお願いします』

マモル「ミカサ？ 宜しく。地球日本。〇〇県海鳴市の上空までお願いします」

ミカサ『了解しました。マモルとアキラは好きな場所でくつろいで下さい』

マモル「うん、分かった」

ミカサAIとの電話を切った。その時、ミカサは発進して出港する。

アキラ「前の方へ行こうよ」

マモル「そうだね」

2人はへさき近くのロビーへ向かった。ミカサは外出用転移盤へ向かっている。

「ミカサ 前方ロビー」

マモル「此处なら、前が良く見えるな」

2人は前方ロビーに到着したら、ミカサは転移盤でエデンの外へ転移した。

アキラ「これが宇宙・・・」

マモル「本物を見たのは初めてだけど、写真通り夜と同じなんだな・
」

アキラ「上も下も左右も分かりにくいから変な感じがするよ」

マモル「うん、僕もそう思う」

ミカサ『ただ今より、地球の近くまでワープします』

船内放送が流れる。その後、ミカサはワープした。

ワープ中・・・

マモル「景色は何も無いし、ソファアに座って待とう」

アキラ「私は、紅茶を持ってくるね」

マモル「お願いするよ。アキラさん」

アキラはロビーを出る。マモルはソファアに座ってゼルスから貰った物を確認した。

マモル（通帳に幾ら入ってるのかな）

マモルは通帳を確認すると驚愕した。金額が200万円も振り込まれている。

マモル「・・・・・・・・ん？」

通帳に紙がはさまれていたので手に取って読む。

『振り込まれている金額は、貴方が居た世元での賠償金または保険金から一部引きました。川神学園の学費に使って下さい。暗証番号は○○○○』

マモル（賠償金・保険金・ああ、僕の死亡によるものか）

アキラ「どうしたの？」

アキラは紅茶を持ってロビーに戻って来た。

マモル「あ、アキラさん。これを読んで」

アキラは紅茶をテーブルに置き、マモルから受け取った紙を読む。

アキラ「賠償金と保険金って・・・」

マモル「多分、元の世元で死亡したから降りたお金だと思うよ」

アキラ「そう・・・なんだ」

マモル「自分が死亡して降りたお金で学費に使うのは変な気分だけだね」

アキラ「あはは・・・同感だよ。紅茶が冷めないうちに飲んでね」

それから10分経ってワープが終わり、ミカサは地球の近くまで到着した。

マモル「これが地球・・・美しいなあ」

アキラ「綺麗・・・」

ミカサは、このまま大気圏突入した。

数分後、海鳴市上空に到着する。

マモル「見たところ、あっちの海鳴市とあまり変わっていない・・・あれ？」

アキラ「何かあったの？」

マモル「向こうの大きな屋敷はあったかな？ うん・・・」

マモルが気になる大きな屋敷。それは月村家であり、あっちの海鳴市には存在していない。

マモル「まあいいや。お隣の喫茶店“葵屋”はあるかな・・・あ、あった」

“葵屋”とはあっちの海鳴市でマモルの家の隣にある喫茶店。しかし、此処の海鳴市では“翠屋”になっている。マモルは知らない。

アキラ「行ってみる？」

マモル「時間がないから今度にするよ。次は麻帆良学園都市を見に行こう」

アキラ「うん、分かった。私がミカサに伝えるね」

アキラは携帯電話でミカサA.Iに指示する。ミカサは旋回して麻帆良学園都市へ向かった。

数十分後、麻帆良学園都市上空に到着する。

マモル「流石、学園都市。多くの学校が集まっているし西洋風の建物が多いな」

アキラ「……………」

アキラは麻帆良学園都市を眺めて、魔力を探っている。

マモル「？」

アキラ（魔力を探ってみたけど、何処にもある微量しか感じない）

マモル「アキラさん？」

アキラ「あ、ごめん。魔力はないか探っていたから」

マモル「魔力？ ああ、あっちの麻帆良学園都市の裏は魔法都市だったね」

アキラ「うん、此処の麻帆良学園都市は魔法と関係無いみたい。世界樹も無いし」

アキラの言う通り、此処の麻帆良学園都市は魔法と一切関係無い普通の学園都市である。世界樹があった場所は時計塔が建っている。

マモル「他に、気になる所はある?」

アキラ「ううん、無いよ。川神市へ行くこつ」

マモル「分かった。僕がミカサに連絡するよ」

マモルは携帯電話でミカサA.Iに指示する。ミカサは川神市へ向かった。

数十分後、川神市上空に到着する。

アキラ「川神市の何処に降りるか考えないと」

マモル「そうだね。気力を探って確認しよう。アキラさんは魔力を探ってくれ」

アキラ「うん、分かった」

2人は川神市全体の気力と魔力を探る。

マモル「何だこれ!?! 高い気力を持つ者が多い。川神院や隣街の大きなビルの方は異常だし」

アキラ（川神院の裏にある林は誰もいない）

マモルはプレッシャーが掛かっていた。

アキラ「? マモルさん、どうしたの?」

マモル「・・・川神院と隣街にある“九鬼”とついたビルから常人離れした気力を感じたんだ」

アキラ「えっ!？」

アキラは指定場所に気力を探る。すると驚愕した。

アキラ「何これ!？ 大き過ぎる」

マモル「アキラさん。魔力の方はどうだった？」

アキラ「魔力は何処にもある微量しか感じなかったよ」

マモル「そうか・・・降りる場所についてだけど、川神院の裏にある林はどうか？」

アキラ「私も賛成。あそこは誰もいないし」

マモル「うん、決まりだね」

2人は転移装置がある部屋へ向かった。

「ミカサ 転移装置の部屋」

部屋に入って転移装置の上に乗るとミカサAIの声がスピーカーから流れる。

ミカサ『座標を設定します。何処に転移しますか?』

マモル「川神院の裏にある林でお願いします」

ミカサ『了解しました。認識障害の結界を張る魔導ミサイルを射出しますのでお待ち下さい』

マモル「ミサイル！？ 大丈夫なの？」

ミカサ『ステルスで無音無害だから心配要りません』

マモル「・・・凄いな」

ミカサからミサイルが射出されて、川神院裏の林に着弾した。そして結界が展開される。

ミカサ『準備が出来ました。転移を開始します』

転移装置が作動して2人は川神市へ転移した。

「川神市 川神院裏の林」

アキラ「さ、寒い・・・」

マモル「2月だからね。鼻が冷えて痛いや」

1ヶ月以上も快適な温度で過ごした2人は自然の厳しさを改めて感じたのだった。

マモル「街を歩き回ろう。体が少し温まるよ」

アキラ「うん、そうだね」

「川神市 川神院」

歩いて数分、川神院の門前に着いた。

アキラ「エデンのスクリーンと感じが違うね」

マモル「実物だからね。氣力を探らなくても緊張感が伝わってくる」

挑戦者A「頼もう!!」

マモ・アキ「!?!」

不意に雄々しい声が響き2人は驚く。背後に道着を着た3人の大男がいた。

マモル「貴方は、武道家ですよね？」

挑戦者A「ん。ああ、その通りだ。君は此処の関係者か？」

アキラ「いいえ、違います」

マモル「ただ、観光で寄っただけです」

挑戦者B「そうかい。デートか、いいねえ」

アキラ「デート・・・／＼／」

マモル「そういえば、アキラさんと2人だけだからデートになるのか・・・」

挑戦者C「おいおい、自覚なかったのかよ」

鉄心「よく来たのう。挑戦者よ」

鉄心（5人か・・・これで孫の欲求不満が少しでも落ち着けば良いが）
いつの間にか門前に立つお爺さん。彼は川神院の主で武神ともいわれる川神鉄心である。

挑戦者A「貴方が武神ともいわれる川神鉄心ですね？」

鉄心「いかにも、ワシは川神鉄心じゃ」

挑戦者A「俺は大熊田剛といいます。お手合わせ願えないでしょうか？」

鉄心「その前に次期武神なる者と戦ってもらう。良いかの？」

挑戦者A「・・・分かりました。俺が勝つたらお願いします」

鉄心「他の者は？」

挑戦者B「異論はありません」

挑戦者C「同じく」

マモル「僕は観光で此処に寄っただけです」

鉄心「む、違うのか？」

アキラ「はい。私は武道家ではありません」

鉄心（うゝむ・挑戦者の3人とは違う感じがするのじゃが）

マモル「でも、興味はあります。見学しても構いませんか？」

鉄心「ホ、ホ、ホ。見学は構わぬ」

マモル「大熊田さん。戦い方を見せても良いでしょうか？」

挑戦者A「良いだろう。俺の技を見せてやる」

アキラ【ねえ、マモルさん。見学するの？】

マモル【将来の為に戦い方を少しでも知っておいたほうが良いと思うよ】

アキラ【なるほど。一理あるね】

鉄心「皆の者。ワシについて来なさい」

5人は鉄心の後について、川神院の中へ入っていった。

第5話 下見に地球へ（後書き）

次回は・・・この流れなら分かりますよね。
あと、風間ファミリーを出すつもりです。
ではまた！

第6話 実戦はまだです

「川神市 川神院」

挑戦者達とマモルとアキラは道場の端で正座して待っている。なお、マモルとアキラは高重力に慣れた為、正座しても平気である。挑戦者達は我慢しているようだ。

挑戦者A（クツ．．いつまで待たせる気だ）

挑戦者B（足が痺れる．．）

挑戦者C（早く来てくれ．．）

マモル（広い道場だけど、壁にキズが多いな）

アキラ（隙間から風が入ってきて寒い．．）

中国の人が道場に入ってきた。彼は川神院の師範代を務めるルー・イーである。

ルー「お嬢さん。隣で失礼するネ」

アキラ「はい。どうぞ」

ルーはアキラの隣に正座する。

暫くして、鉄心が道場に入ってくる。続けて2人の女性が入ってきた。黒髪ロングヘアで前髪が交わった女性は川神百代。赤髪ポニー

テールの女性は川神一子。

鉄心「待たせてすまんのう。立って良いぞ」

正座していた6人は立つ。しかし、挑戦者達はすぐ転んで悶えている。

挑戦者達「あ、足が・・・」

百代「ククツ。だらしないな」

鉄心「これ、百代。笑うでない」

百代「ジジイだって、口が歪んでいるぞ」

一子「大丈夫？」

マモル「長く待っていたからね。時間が経てば治るよ」

ルー「お2人さんは、平気の様だね」

アキラ「鍛えていますから」

数分後、挑戦者達は落ち着き自己紹介が始まる。

鉄心「さて、自己紹介せねばならんのう。さっき名乗ったが、改めて名乗ろう。ワシは川神院の長、川神鉄心じゃ」

百代「私は川神院次期総代の川神百代だ」

一子「アタシは川神一子。川神院の師範代を目指して頑張っています」

ルー「僕は川神院の師範代を任されている者。ルー・イーです」

マモル「僕は空野マモルといいます。観光で川神市に来ました」

アキラ「私は大河内アキラといいます。観光でマモルさんと来ました」

そして、挑戦者達の自己紹介が終わり・・・

百代「対戦相手は誰からだ？」

指を鳴らしながら言う百代。

挑戦者A「鉄心殿。まさか、その人が次期武神なのですか？」

鉄心「そうじゃ。全力で頼むぞい」

挑戦者A（女だったとは・・・ふふふ、勝ちを貰ったな）

アキラ【百代さんっていう人。かなり強いよ】

マモル【うん、気力が違い過ぎる。鉄心さんやルーさんも・・・】

観戦の6人は端で正座する。鉄心と百代と挑戦者Aは道場の中央に立った。

鉄心「西方、川神百代」

百代「はい！」

鉄心「東方、大熊田剛」

挑戦者A「はい！」

鉄心「この対戦は1本勝負。ルールはどちらが戦闘不能になるか降参した場合、負けとする。良いな？」

百代・挑A「はい！」

対戦両者は一礼する。

鉄心「いざ、尋常に・・・」

対戦両者は構えを取った。

鉄心「始めいつー！」

挑戦者A「だあああつー！」

合図が響いた時、挑戦者Aは百代に向かって突進した。

百代「・・・」

挑戦者Aは殴りかかるが、百代は左手で攻撃を受け止める。隙が生じた挑戦者Aの腹に右拳を入れた。

挑戦者A「ごほっ！」

カウンターを食らった挑戦者Aは吹き飛ばされ壁に衝突する。壁に新たなキズが刻まれ挑戦者Aは気絶した。

鉄心「勝者、川神百代！」

百代（弱いな・・・マモル、アキラといったか・・・あの男女は期待出来そうだ）

一子「流石、お姉さまっ」

アキラ「一瞬だったね・・・」

マモル「うーん、1つも参考にならないや」

ルー「大熊田殿は突っ込み過ぎネ」

挑B・挑C「・・・・・・・・」

観戦していた挑戦者達は目を丸くして固まっている。挑戦者Aは担架で安静室へ運ばれて行った。

鉄心「次の者。前へ・・・どうした？ 返事せんか！」

挑戦者B「はっ！ いやいや、棄権します」

挑戦者C「俺も！」

挑戦者2人は必死で顔を横に振りながら棄権する。

挑B・挑C「失礼しましたーっ!!」

挑戦者2人は慌てて道場を出て行ってしまった。

一子「あらあ、行っちゃったわよ」

アキラ「それは無理もないと思う。一撃で飛ばされたし」

鉄心「フウ。いきなりではあるが、対戦終了じゃな」

百代「おい！ ジジイ！ その2人は出ないのか？」

鉄心「期待させてすまんが、この2人は見学に来ただけで挑戦者ではない」

百代「見学だと！ その2人の気は師範代クラスだぞ・・・いや、それ以上か」

マモ・アキ「！」

鉄心「分かっておる。じゃが、戦う意思が無ければ無理強いは出来ん」

マモル「あの〴〵百代さん。氣力を探れるんですか？」

百代「ああ、私だけではないぞ。このジジイやルー師範代や一部の修行僧もな」

アキラ「隣街にある大きなビルから大きな氣力を感じただけど、何か知っていますか？」

鉄心「七浜の九鬼財閥か。あそこはヒューム殿が師として戦闘向きの侍従達を鍛えているのじゃよ」

百代「ヒュームさんはジジイと同じく私よりも強いぞ。武道四天王の一人である揚羽さんの師匠なんだ」

マモル「強い人達を揃えるなんて、凄い会社ですね」

百代「何処の流派か、教えてくれないか？ あと敬語は使わなくていい。年は近いしな」

アキラ「流派なんて無いよ」

マモル「何処の流派にも属しない師に基礎鍛錬や術技を教えてもらっているけど、実戦はまだです」

百代「そうか・・・早く実戦について教えてもらえ。私はマモルかアキラと闘いたいからな」

アキラ「うん、分かった。満足出来る試合になるように頑張るね」

百代「ははは、頑張れ。期待しているぞ」

一子「どんな基礎鍛錬をしているの？ 興味あるわ」

マモル「車輪が無い人力車を引いたり、雲梯の塔に登ったりしてるよ」

ルー「変わった基礎鍛錬ネ。これならバランス良く筋力が上がるよ」

一子「雲梯もメニューに加えようかな・・・公園にあったし」

鉄心「百代に一子よ。修行は大事じゃが、勉強を怠るでないぞ。1年間の成果が試される学年末考査まで3週間もないからのう」

百代・一子「うっ・・・」

鉄心「名前で思い出したが、そなた達は4月から我が学園の2年生に編入するのじゃな？」

アキラ「はい、そのつもりです。もしかして、鉄心さんは学園長ですか？」

鉄心「ホ、ホ、ホ。そうじゃ。よく分かったのう」

マモル「2つも重役を務めるとは、凄いですね」

鉄心「そんなに忙しくはないぞい。月末に編入試験がある。頑張るんじゃぞ」

マモ・アキ「はい！」

百代（ふふふ、来年度は楽しくなりそうだ）

一子「同じクラスになれるといいわね」

ルー「川神市へ観光に来たのは下見なのかい？」

マモル「うん、川神院は有名だから最初に寄りました」

ルー「そうだね。川神院は武道の総本山で己を高める有志達が集まる場。修行は勿論、入門はかなり厳しいネ」

マモル「そうですね・・・分かります。その他に良い所ありますか？」

ルー「駅から少し離れたイタリア商店街にお店が色々あるよ。うちの学園の学生達が多く遊びに行くネ」

一子「オシャレな感じで、きっと気に入ると思うわよ」

アキラ「そうなんだ。あとで行ってみるね」

百代「ナンパが多いから気を付けろよ」

アキラ「マモルさんと一緒だから心配ないよ」

百代「ははは、マモル。彼女をしっかりと守るんだぞ。美人だからな」

マモル「勿論です」

鉄心「若い者は良いのお」

ルー「そうですね」

一子「あつ、そうだ！携帯電話のアドレスを覚えてくれない？もう友達だからね」

アキラ「うん、分かった」

若者4人は赤外線で携帯電話のアドレスを送信・登録した。

一子「アドレスの“eden”って知らないメーカーね」

アキラ「何処で入手したのかは言えないけど、私とマモルさんの携帯電話は特別製だよ」

マモル「充電不要で、山奥だろうが、外国だろうが、圏外でも連絡出来る仕様です」

一子「へえ〜とても便利ね」

百代「凄い携帯電話だな。舎弟は欲しがるかもしれん」

マモル「舎弟？」

百代「私の幼馴染でな。強くはないが、かなりの切れ者だ」

マモル「仲間も只者じゃないね・・・」

一子「・・・（↑ブルブル）」

一子は突然、怯えてしまった。

アキラ「一子さん？ どうしたの？」

百代「ワン子は勉強が苦手なんだ。舎弟はDSで試験勉強がスバルだからな」

マモル「な、成る程」

鉄心「バカモン！ 人の事言えんじやろうが！」

不意に鉄心が百代に一喝するが・・・

百代「くっ」

アキラ（あ、聞き流した）

鉄心「はー。しょうがない孫じゃ・・・」

修行僧「鉄心様、ルー師範代、そろそろ昼食の時間でございます」

鉄心「む・・・もう昼か」

一子「あ、いけない。もっと話したいけどアタシは昼食の準備に行かなくちゃ」

アキラ「仕方ないよ。話したい事があつたら携帯電話を使えば良いし」

一子「そうね、いつになったら会えるの？」

マモル「月末は試験期間だから難しいな、新学期になると思っよ」

一子「そっか・・・また学校で会おうね。待っているわよ」

マモ・アキ「うん、またね」

一子は走って道場を出て行った。

マモル「僕とアキラさんは街を回りますので、この辺で失礼します」
ル「そうかい。休日は変わり者が多いから、慣れていないうち街を回る時は1人にしないほうが良いネ」

アキラ「はい、分かりました」

百代「強くなって戻って来い。いつか、死合おうぞ」

アキラ「うん、それと試合の文字が違うよ・・・」

百代「ははは、気にするな」

マモル「鉄心・・・いえ、学園長。月末の編入試験は、宜しく願います」

アキラ「今日はありがとうございました」

鉄心「うむ、気を付けてな」

マモルとアキラは鉄心達に一礼して川神院を後にした。

第6話 実戦はまだです（後書き）

次回も川神市の下見は続きます。

ご感想とかがありましたら、遠慮なくどうぞ。
ではまた！

第7話 風間ファミリー

「川崎市 金柳街ファミレス」

京「大好きだよ。はい、あ〜ん」

スプーンで真っ赤なモノを差し出す女性。彼女は椎名京。

大和「口の中が火事になるから遠慮します。あと、お友達で」

京「う〜温まるのに・・・」

丁寧にお断りする男性。彼は直江大和。

卓也「温まるレベルじゃないよ。それは」

ツツコミを入れる男性。彼は師岡卓也。

岳人「俺様も彼女とあやってみてえ・・・」

不機嫌そうに呟く男性。彼は島津岳人。原因は昨日チョコを1つも貰えなかったからである。

卓也「それにしても、キャップはフリーダムだね。いきなり旅に出るなんて」

大和「数日は戻らないな。良い土産を持って来るから金曜集会は楽しみにしてろって言ってた」

店員「お客様、こちらのテーブルになります」

マモル「どうも」

マモルとアキラは仲良し4人の隣テーブルの席に座る。

席の配置は

アキラ　大和・京

マモル　岳人・卓也

で間を隔てる壁は無い。

アキラ「此処は私達と年が近い人が多いね」

マモル「そうだね。お隣さんは仲が良さそうだし」

岳人「モロ、隣を見るよ。すっげー美人がいるぜ」

卓也「モモ先輩より背が高そう・・・ガクト。まさかナンパするの？」

大和「止めておけガクト。デートかも知れないぞ？」

京「彼氏に殺されるよ。愛の力は怖い」

大和「京からの愛が怖い気もするが・・・」

岳人「世の中、上手いかなえか・・・チクショー」

マモル「川神院で友達が出来て良かったけど、問題が1つあるな」

アキラ「うん、成り行きで百代さんと対戦の約束をしてしまったし」

岳人「なあ大和。隣はとんでもない事を言ってるぞ」

大和「ああ、俺も聞こえた。姉さんと戦う約束をしたらしいな」

卓也「強そうには見えないけど、大丈夫かな」

大和「一応、忠告しておくか」

京「そういう優しさがあるから大和の事が好きだよ」

大和「君、ちょっと良いかな？」

大和は隣の2人に声をかける。

マモル「貴方は？」

大和「百代の幼馴染だ。君達は百代と戦う約束をしたのは本当か？」

アキラ「私達の話聞いてたんだ・・・約束は本当だよ」

マモル「もしかして、貴方は百代さんの舎弟かな？」

大和「ああ、俺は直江大和。姉さんはかなり強いから対戦は止めたほうが良いと思うぞ」

アキラ「百代さんは挑戦者を一撃で飛ばしたから強さは理解出来るよ」

卓也「あはは・・・相変わらずだね。モモ先輩は」

岳人「登校の時、たまに数十人の不良達を一瞬でぶっ飛ばしているからな」

マモル「其処までしているとは・・・あ、紹介が遅れてごめん。僕は空野マモルといいます。こちらの女性は大河内アキラです」

アキラ「私達は川神学園の編入試験で合格出来たら新学期、2年生に入るので宜しくお願いします」

大和「そうか・・・宜しくな。成績が良ければクラスを指定出来るから、お願いすれば俺達と同じクラスに入れるよ」

マモル「そうなの？ 試験勉強を頑張るね」

大和「皆、こちらの2人に自己紹介を頼む」

岳人「おう！ 俺様は島津岳人だ。フンッ！」

岳人はポーズを取って体自慢する。

卓也「ガクト、レストラン内でポーズを取らないでよ！ 僕は師岡卓也です」

京「私は椎名京」

マモル「皆さん、宜しく。百代さんと一子さんを合わせて幼馴染は6人かな？」

岳人「いや、7人だ。リーダーである風間翔一がな」

大和「俺ら7人仲良しグループ“風間ファミリー”と呼ぶ」

アキラ「絆が深いんだね。どんな困難でも乗り越えられる気がする」

マモル「うん、僕もそう思う」

卓也「ちょっと言い過ぎだと思っけど、ありがとう」

大和「ところで、お前はどれ位強いんだ？」

マモル「力と速さは自信があるけど、実戦はやった事が無いので強いといえるか分からない」

岳人「・・・試しに、俺様と喧嘩で勝負するか？」

アキラ「試合でも無いのに殴り合いは良くないよ。怪我でもしたら大変だし」

岳人「フンッ！ 俺様の身体は頑丈だ。そう簡単には怪我しねえぜ」

自信満々で、またポーズを取る岳人。

卓也「そういう問題じゃないでしょ！ ってか、此処でポーズを取らないでよ」

京「しょーもない」

マモル「押し出しの相撲や重量上げ等の力比べはどうか？」

大和「それなら安全で、問題は無いな。場所はどうする？」

岳人「河原でいいだろ。多くの人は決闘でよく使っているしな」

大和「そうだな・・・河原にするか」

昼食を済ませて、多馬川の河原へ向かった。

「川神市 多馬川南河原」

マモルは岳人と相撲で勝負する事になった。大和は審判で他3人は観戦である。

岳人「マモル。全力でかかって来いよ！」

マモル「・・・分かった」

大和「ルールを確認するぞ。この相撲は押すだけで他の行動は禁止。円を描いた線の外に出たら負けになる。これで良いか？」

マモ・岳人「うん！／おう！」

大和「位置について」

対戦両者はしゃがんで、相撲の構えを取る。

大和「始め！」

合図が響き、マモルと岳人はぶつかり合った。その時・・・

岳人「うわーっ!!」

岳人は10メートル以上押し飛ばされた。先は草むらなので怪我の心配は無い。

大和「勝者は空野マモル！ 流石、姉さんに目を付けられただけあるな」

京「びつくり・・・」

卓也「その割には、落ち着いてるね」

アキラ「マモルさん。やり過ぎだよ」

マモル「悪い。少し力を入れただけで、こうなると思わなかった」

大和「あれで全力じゃないのか・・・」

岳人は起き上がり、元へ戻って来た。

岳人「スゲーなお前は。どういう鍛え方しているんだ？」

マモル「車輪が無い人力車引きと雲梯の塔で鍛錬しているよ」

卓也「その他にもあるよね？」

マモル「あるけど、教えるのが難しい。」ごめん」

アキラ「京さん。ちょっといいかな？」

京「・・・何？」

アキラ「勘違いだったらごめんね。京さんは大和さんの事が好き？」

京「！？ うん、好きだよ。大和は私にとって大切な

大和「友達だ！」

京（ちえ〜）

アキラ「そうなんだ・・・応援するから、頑張つてね」

京「ありがとう。よく分かったね」

アキラ「貴方が大和さんをよく見ていたから分かるよ」

大和「マモル。今後の為に携帯電話のアドレスを教えてくれないか？」

マモル「いいよ」

男4人は赤外線で携帯電話のアドレスを送信・登録した。

卓也「見た事が無い型だね。何処のメーカー？」

マモル「この携帯電話は特別製なので、何処のメーカーでも無いよ」

岳人「特別製ねえ・・・どんな機能があるんだ？」

マモル「機能と動作はパソコン並で、圏外でも連絡は出来るよ。あ

と充電は要らない」

大和「凄いな。俺も欲しいぞ」

卓也「僕も！」

マモル「何処で入手したのかは、秘密なんだ。ごめん」

大和「そうか・・・」

マモル「頼めば、貰えるかも知れないから期待はしないでね」

大和「ああ、分かった」

岳人「なあマモル。アキラっていう女と、どういう関係なんだ？」

マモル「アキラさんは僕の彼女です」

卓也「あ、やっぱり付き合っていたんだね」

岳人「抱き合ってキスは、したよな？」

マモル「キスはまだだよ。18歳になって婚約しないとダメだし」

大和「律儀だな・・・お前は」

京「。。。。。。は愛情だよ」

アキラ「。。。。。。って何？」

京「知らない？ ソレはね」

大和「こらこら京。アキラも純情らしいから、変な事は教えない」

アキラ「？」

卓也「そういえば、マモルとアキラはお互い、さん付けで呼んでるよね」

岳人「付き合っているのに、それはおかしくねえか？」

マモ・アキ「あ・・・」

大和「まあ・・・2人は真面目そうだからな」

皆の指摘を受けてマモルとアキラはお互い、名を呼び捨てで呼ぶ事になった。

岳人「マモルは観光で此处に来たよな？ 案内のついでに俺達と一緒に遊ばないか？」

卓也「川神は良い所が沢山あるよ。変な人も多いけど」

マモル「助かるよ。お願いします」

大和「決まりだな。まずは川神学園まで行こう」

河原沿いを歩いて大橋の方へ向かった。

「川神市 多馬大橋」

マモル「大きくて長いね」

アキラ「風景は綺麗だけど、近くの河原は荒れてる・・・」

大和「あはは・・・其処は姉さんの仕業なんだ」

岳人「さつき言っただろ？ 其処でよくモモ先輩が不良達や挑戦者と戦っているんだぜ」

卓也「2人も通学する事になったら、ほぼ毎日見れるから分かると思うよ」

京「毎日飽きないよね。皆は」

様々な感想を述べ、橋を渡る。変態の橋だけあって、橋に変人が多かった。

「川神学園 校門」

マモル「古風な校門だな」

アキラ「学園名の表札が道場の看板みたい」

大和「2人共、言っておきたい事がある」

マモル「言っておきたい事？」

大和「ああ、川神学園の生徒達は闘争心が強く“決闘システム”による果し合いが多い。マモルとアキラは強いと知られると、挑まれるから頑張ってくれ」

岳人「断る事も出来るが、後で面倒な事になる。潔く受け入れたほうが良いぜ」

卓也「場合によっては、授業が潰れて2つのクラスと大決闘が発生するんだ」

京「夏にSクラスと決闘があつたよ」

大和「あの時、うちのクラスは負けてしまったけどな」

岳人「特に、不死川ってヤツの高笑いはムカついた」

卓也「マモルとアキラが僕のクラスに入れたら良い戦力になるんじゃない？」

大和「そうだな」

岳人「入れたら、Sクラスのヤツらにギャフンと言わせてやろうぜ」

マモル「気が乗らないけど、分かりました」

アキラ「貴方達は、何処のクラスにいるの？」

大和「俺達はFクラスにいる。2年生もFクラスになるから覚えておいてくれ」

アキラ「うん、覚えておく。入れるように頑張るね」

卓也「次は、駅周辺へ行こうよ」

マモル達は川神学園を後にして、川神市の色んな所を回った。

第7話 風間ファミリー（後書き）

次回予告。マモルとアキラはエデンに帰りますが、その途中で“闇の書”を発見します。これからどうなるか、お楽しみに！
ではまた！

第8話 リンフォース

〃川神市 川神駅前〃

イタリア商店街や地下街アゼリアなど、川神市内を回る。そして日が暮れ、帰る時間が迫っていた。

マモル「もう夕方か。時間が経つのは早いな」

アキラ「まだ行ってない所があるのに・・・」

大和「仕方ないさ。楽しい時間は、あっという間に過ぎてしまうからな」

岳人「また来週、此处に来れば良いじゃねえか？」

マモル「やらなければならない事があるから、それは難しいね」

卓也「マモルとアキラは受験勉強があるもんね。今度は、いつ会えるの？」

アキラ「3月は分らない。多分、新学期になると思うよ」

京「その時、大和は私の夫になっている」

大和「笑えない冗談だな・・・おい」

岳人「勉強頑張れよ。待っているぜ」

京「気楽で良いね。ゴリラは」

岳人「何だと！ どうゆー意味だ！」

大和「ガクト、忘れたのか？ 範囲が広い学年末テストがあるぞ」

卓也「留年は無いけど、頑張らないと春休みが消えるね」

岳人「はあ・・・気が重いぜ。モロ、勉強教えてくれよ」

卓也「しょうがないなあ・・・」

マモル「大和。一子さんは怖がっていたから、優しく勉強を教えてください」

大和「ワン子の頑張り次第なんだが・・・善処しよう」

皆は、時間ギリギリまで色んな話をした。

マモル「今日は、とても楽しかったよ」

アキラ「案内してくれて、ありがとう」

大和「礼はいいぞ。俺も楽しかったからな」

京「・・・気を付けてね」

岳人「またなー！」

卓也「さようならー」

マモルとアキラは風間ファミリーと別れ、転移しても問題無い所へ向かった。

「川神市 川神院裏の林」

マモル「結界の力は凄いな。人の気配がしない」

アキラ「うん、林全体が不気味・・・転移しても大丈夫だよ」

マモル「そうだね。僕がミカサに電話するよ」

アキラ「ちょっと待って！」

マモルはミカサに電話しようとしたら、アキラに呼び止められた。

マモル「どうしたの？」

アキラ「あれ・・・」

アキラは、ある方向に指差す。其処には本らしき物が落ちていた。

マモル「本？ 朝来た時は無かった筈だけど・・・アキラ。あの本を拾ってきて」

アキラ「うん、分かった」

アキラは落ちていた本を回収して、マモルの元へ戻る。本は666頁もあるので辞書の様に厚い。

アキラ「これ、鎖で縛られてるよ」

マモル「鎖があるなんて、まるで魔法の本みたいだなあ」

アキラ「魔法・・・この本に魔力はないか、探ってみるね」

魔力を探してみると、本から少々強い魔力を感じた。

アキラ「マモル・・・」

マモル「うん、魔法に係する本のようにだね・・・うわっ！」

アキラ「きゃっ！」

突然、本から妖しい光が放出され、浮かび上がる。そして鎖は外れて消えた。

闇の書『闇の書を起動します』

本は闇の書だった。音声 flowed した後、魔法陣が出現する。

マモル「ま、魔法陣？」

アキラ「まさか・・・悪魔が出てくるの？」

マモル「アキラ。嫌な事を言わないでくれ」

闇の書『・・・ヴォルケンリッター呼び出しのエラーを確認。代行として管制人格の呼び出しを実行します』

魔法陣は何も反応せず消える。闇の書は開いて長い銀髪の女性が出て来た。

マモ・アキ「……………」

リン「いくら足掻いても、闇は終わらないのか……」

悲しい表情で呟く女性はリンフォース。マモルとアキラは状況が分からず茫然としていた。

マモル「……あの、貴女は何者ですか？」

暫くして、マモルはリンフォースに問いかける。丁度、闇の書はリンフォースの手元に落ちた。

リン「私はこの本“夜天の魔導書”の管制人格です。我が主」

アキラ「我が主って……どういう事？」

リン「お2人は、相性が良かったので夜天の魔導書の主と選ばれました。本来なら1人なのですが、隣り合っていて一緒に契約されたようです」

アキラ「そうなんだ……名前は何というのかな？」

リン「名前ですか……リンフォースといいます。元々名前はありませんでした、一代前の主が付けてくれました」

マモル「祝福の風か……良い名前だね。僕は空野マモルです」

アキラ「私は大河内アキラです。宜しくね」

リイン「はい、宜しくお願いします。我が主」

マモル「此处は暗くて寒いから話の続きは、ミカサでしょう」

アキラ「うん、風邪を引いたら困るし」

リイン「我が主。ミカサとは何なのでしょうか？」

マモル「宇宙船の名前だよ。僕とアキラは移動要塞のエデンに住んでいるんだ」

マモルはミカサに連絡して、アキラとリインフォースと一緒にミカサの中へ転移させた。その後、ミカサは地球を出てエデンへ向かう。

「ミカサ 前方ロビー」

マモル達は転移装置の部屋から移動し、船首近くのロビーにあるソファで話し合いをする事になった。マモルの隣はアキラで向かいのリインフォースが座っている。

アキラ「紅茶を飲んで温まってね」

リイン「心遣いありがとうございます。我が主」

マモル「内容は沢山あるから、質問形式で良いかな？」

リイン「はい、それで構いません」

マモル「夜天の魔導書はどんな物ですか？」

リイン「使える魔法は素質による制限があります。蒐集を行い記録された魔法を素質に関係無く使えるようになる魔導書です」

アキラ「そんな便利な物を悪い人に盗られたら大変だね」

リイン「はい。その対策として幾つかのプログラムが組み込まれています。その1つ、魔導書の管理をするマスタープログラムは私なのです」

マモル「成る程。他のプログラムはどんなものがあるの？」

リイン「外敵から魔導書を守る防衛プログラムと、主を守る守護プログラム“ヴォルケンリッター”があります」

アキラ「さつき、ヴォルケンリッターを呼び出そうとして失敗したみたいだけど、どうなっているの？」

リイン「切り離したので、今の魔導書には入っていません。一代前の主と一緒に暮らしています」

マモル「そうか・・・夜天の魔導書と闇の書はどういう関係ですか？」

リイン「何代か前の主が戦いの道具として無理に改造した為、異変が起きました。バグによる防衛プログラムが暴走し、私でも抑えきれず世界を滅ぼしてしまったのです。それで闇の書になりました」

アキラ「ひ、酷い・・・」

マモル「その後、どうなったの？」

リイン「蒐集を行い完成した後、暴走を始めて世界と共に滅びます。転生機能で復活して蒐集と世界の破壊を繰り返すようになりました」

アキラ「蒐集を行わなければ大丈夫だよね？」

リイン「いいえ。放っておくと闇の書は魔力ごと主を喰らい、新しい主を見つける為に別世界へ転移するでしょう」

マモル「一代前の主は無事だったようだけど、どうやって滅亡を回避したんだ？」

リイン「一代前の主と魔導師達と協力して暴走した防衛プログラムを切り離す事が出来ました。後は激戦の末、防衛プログラムの消滅に成功したのです」

アキラ「なんだか、想像出来ない・・・」

リイン「防衛プログラムは無くなっても、私の体内で新しいのが造られてしまう。それを防ぐ為に私も消えるしか無かった。私達を道具ではなく家族としてみてくれた一代前の主にヴォルケンリッターを託して、私だけ逝きました」

マモル「自分だけ消えるなんて悲し過ぎる・・・」

アキラ「うん・・・」

リイン「でも無駄だった・・転生しないように対処したのに、此処に復活してしまった。残念な事に防衛プログラムは完成しています」

マモル「振り出しに戻ったという事か。うーん・・解決方法が見つからない。どうすれば良いんだ・・」

リイン「解決方法は、前回と同じように防衛プログラムを切り離して、私を元の状態に修復するしかありません」

アキラ「マモル。マザーと相談しようよ」

マモル「そうだね。僕達だけでは、どうしようも無いし」

リイン「我が主。マザーと呼ばれる御方は何でしょうか？」

マモル「エデンを管理するマザーコンピュータです」

リイン「私のような存在なのですね」

アキラ「うん、人の形を持たないけど頼りになるよ」

ミカサ『エデンに到着しました』

マモル達は話をしている中、船内放送が流れる。窓の方を見ると外はエデン宇宙港だった。

マモル「もう着いたのか・・早いな」

アキラ「話に夢中で気付かなかった・・」

リイン（此処がエデン・・・文明のレベルは高そうだな）

マモル達はミカサから降りて宇宙港を通り、上層へのゲートをくぐった。

「エデン 下層ゲート棟」

ゲート棟の外に出ると上層は夜だった。何故なら地球日本と同じ時間帯に合わせているからである。今の時刻は18時12分。

リイン「我が主」

マモル「ん、何かな？」

リイン「人の気配はしませんが、此処はいい・・・」

マモル「此処は僕達3人しか居ません」

アキラ「後で詳しい説明をするから、今はマザーの所へ行こう」

リイン「はい。分かりました」

湖西駅から湖北駅までモノレールに乗り、マザーエデンの元へ向かった。

「エデン 管理塔」

マザー『おかえりなさい。マモル。アキラ』

マモ・アキ「ただいま」

マザー『地球はどうだったでしょうか？』

マモル「寒かったけど、楽しかったよ」

アキラ「あと、友達も出来ました」

マザー『それは良かった。しかし、古代ベルカの遺産である夜天の魔導書を持って帰るとは・・・驚きました』

リイン「初めまして。私は夜天の魔導書の管制人格、リインフォースといいます」

マザー『紹介ありがとう。私はエデン全体を管理するマザーコンピュータです。マザーって呼び下さい』

リイン「はい。マザー」

マモル「マザー。相談したい事があるんだけど、闇の書になってしまった夜天の魔導書を何とか出来ませんか？」

マザー『分かりました。リインフォース、夜天の魔導書をスキャンしますので机の上に置いて下さい』

リイン「はい、分かりました。お願いします」

リインフォースは夜天の魔導書を真ん中の机に置き、本の中に入っ

ていった。

マザー『スキャン開始!』

机天板が光出して、夜天の魔導書のスキャンが始まった。

数分後・・・

マザー『スキャン完了! 出てもいいですよ。リインフォース』

スキャン終了の知らせを告げ、リインフォースは本から出てくる。

マモル「結果はどうだった?」

マザー『申し上げにくいのですが・・・改造の後、転生と再生を重ねた所為で基礎構造が異常です。修復は望めません』

アキラ「そんな・・・」

マモルとアキラは暗い顔になる。リインフォースは分かっているの
で表情を変えていない。

リイン「闇を終わらせるには、どうすれば・・・」

マザー『夜天の魔導書を破壊したら転生してしまうので、解体を行います。そうすれば、闇の脅威は無くなります』

マモル「解体って・・・そんな事をしたらリインフォースはどうなるんだ?」

マザー『必然的にいうと消滅します。ですが、メモリーを私の中に保存すれば存在を維持出来ます』

リイン「そ、そんな事が・・・可能なのですか？」

リインフォースは困惑していた。いきなり都合の良い話が出たから無理も無い。

マザー『はい。可能です』

リイン「……………」

リインフォースは顔を下に向けている。彼女の気持ちは嬉しいのか寂しいのか複雑であった。

マザー『リインフォース。お願いがあるのですが・・・』

リイン「あ、はい。何でしょうか？」

マザー『お恥ずかしい事に、私はエデンから出られません。貴女の新しい体を用意しますので、外では私の代わりにマモルとアキラをサポートして欲しいのです』

リイン「分かりました。いえ、是非やらせて下さい。命に代えても我が主達をお守り致します」

マザー『ありがとうございます。でも、立場は上も下もありません。ほら！』

アキラ「マザーの言う通りだよ！ 貴女はマモルと一緒に家族なんだから」

マモル「命に代えても”だなんて悲しい事は言わないで欲しい。お互い助け合おうよ”」

リイン「我が主・・・ありがとうございます。私は一代前の主と出会った時と同じほど幸せです」

リインフォースは此処で初めて微笑む。マモルとアキラも笑顔で返した。

アキラ「出来れば、名前で呼んで欲しいな」

マモル「ああ、貴女は夜天の魔導書のマスタープログラムでは無くなるんだし」

リイン「そうですね。宜しくお願いします。アキラ。マモル」

マモ・アキ「うん！」

マザー『解体作業を始めます。再会は来週になりますが、宜しいですか？』

リイン「はい。お願いします」

マモ・アキ「リインフォース」

リイン「マモル。アキラ・・・」

マモル「再会を楽しみにしているよ。行ってらっしゃい」

アキラ「来週会おうね。待っているから」

リン「はい。行ってきます」

マモルとアキラは見送る。リンフォースは再び本の中へ入っていた。

マザー『此処に居ると危険なので、貴方達は家にお戻り下さい』

マザーエデンは2人に帰宅をすすめた。何が危険なのかというと夜天の魔導書による魔力の余波や防衛プログラムの抵抗である。

マモル「？ ああ、分かった。リンフォースをお願いします」

アキラ「作業を頑張ってね」

マザー『はい。任せて下さい。今日はお疲れ様でした』

2人はマザーエデンに挨拶をする。その後、管理塔を後にし我が家へ帰っていった。

22時頃、マザーエデンから“無事に解体作業が完了した”と通知が届く。それでマモルとアキラは安心したのだった。

第8話 リインフォース（後書き）

今回は、新生したリインフォースが出ます。

外見は変わりませんが、身長が高くなっています。（アキラより少し高い）

いつか、彼女を八神はやて達に会わせるつもりです。

川神学園についてですが、リインフォースも2・Fに編入させます。そして5月に義経や弁慶や与一など、登場させる予定です。ではまた！

第9話 新生リインフォース

（2月22日（日））

夜天の魔導書の解体が終わって1週間経った。管理塔から北にある建物で、新しい体を得た彼女が眠っている。

「エデン 研究所」

ある部屋の中に、棺の様な大きいカプセルが1つ設置されている。

ピッピッピッ・・・

パカッ！！

カプセルの電子音が鳴り、フタが開く。中に眠っていた彼女は目を覚まして起き上がった。そして周りを見回す。

リイン（此处は・・・研究所か）

リインフォースは軽く体操をして自分の身体を確認する。調子は良く何も問題無い。服は黒では無く白いワンピースを着ていた。

リイン（身体が軽い・・・これが私の新しい体か）

ピーピーピー

リイン「ん？」

机の上にある携帯電話のアラームが鳴り響く。リインフォースはそれに気が付いて、携帯電話を取り繋げた。

マザー『こちらマザー。おはようございます。リインフォース』

リイン「あ、おはようございます」

マザー『身体の調子はどうですか？』

リイン「はい。前と比べて身体が軽く、気分は絶好調です。異常はありません」

マザー『それは良かった。色々説明したいので、此处から南にある管理塔まで来てくれませんか？』

リイン「分かりました。今から、そちらへ向かいます」

マザー『お願いします。それと、今使っている携帯電話は貴女の物ですので、持っていて下さい。それでは』

リインフォースは電話を切った後、日付を確認した。

リイン（あの時から7年・主やヴォルケンリッターは、今どうしているのだろうか・いつか、会いに行くから待っていてくれ）

前の主達（八神はやて達）との再会を楽しみにして研究所を後にする。南の並木道を通って管理塔へ向かった。

＝エデン マモルとアキラの家＝

マモル「・・・・・・・・」

アキラ「・・・・・・・・」

2人はオセロで遊んでいる。マモルは黒でアキラは白で勝負中。今日は日曜日なので模試と修行は休みである。

マモル「其処だ！」

アキラ「あつ」

白が黒に替わって逆転した。しかし・・・

アキラ「貰ったっ！」

マモル「あ、ああつ」

黒が白に替わって逆転した。マモルは反撃が出来ず、ゲーム終了。

アキラ「ふふつ。私の勝ちだね」

マモル「ム、ムム・・・もう1度、勝負して良いかな？」

アキラ「いいよ」

ピーピーピー

マモ・アキ「!？」

突然、マモルの携帯電話の着信音が鳴り出した。

アキラ「それって、もしかして・・・」

マモル「うん、リインフォースの事だろうね。別れてもう1週間に
なるし」

ゲームを中断して、マモルは携帯電話を取って繋げた。

マザー『こちらマザー。おはようございます』

マモル「おはよう。用件は何かな？」

マザー『はい。リインフォースは、私の元に居ます。今から迎えに
来てくれませんか？』

マモル「ああ、分かった。そちらへ向かうからリインフォースに伝
えてくれ」

マザー『了解しました』

電話を切る。

マモル「リインフォースが待っているからマザーの所へ行こう」

アキラ「うん、分かった」

2人はオセロを片付けて管理塔へ向かった。勿論、モノレールを利
用している。

「エデン 管理塔」

リインフォースはエデンについての説明を受けている。

マザー『エデンの説明は以上です。何か訊きたい事がありますか？』

リイン「何の為に此处が造られたのか、理解しました。我々の敵であるオグマは何処にいるのですか？」

マザー『現在、確認された場所は1つ。ミッドチルダです』

リイン「なっ！？」

リインフォースは驚いていた。自分と縁がある世界なので当然である。

マザー『ミッドチルダに潜むオグマは冬眠中で数年は大丈夫でしょう。その間に貴女を含めてマモルとアキラは強くならなければなりません』

リイン「・・・そうですね」

リイン（厳しいな。神様によって造られた物ならば、此处はロストロギアの宝庫・・・管理局と関わるのは危険かも知れん）

ウィーン

自動ドアが開いてマモルとアキラが部屋の中に入って来た。

リイン「あつ。マモルにアキラ。お久しぶりです」

リインフォースは椅子から立ち上がってマモルとアキラの元へ近寄ってきた。

マモ・アキ「!？」

リイン（前会った時と身長が違う・私のほうが高いのか）

マモルとアキラは驚きの表情を見せた。何故ならリインフォースの身長は2人より少し高くなっているからである。

マモル「1週間ぶりだね。しかし、僕より背が高くなっているとは・驚いた」

アキラ「前より凛々しい雰囲気を感じるよ」

リイン「そう見えるのでしょうか？」

マモル「うん、白いワンピースも似合っているよ」

リイン「あ、ありがとうございます／＼」

マザー『皆さん。リインフォースについて説明したいので椅子に座ってください』

マモ・アキ・リイ「はい」

マザーエデンに言われ、3人は椅子に座った。真ん中の机は撤去されて代わりに椅子が設置されている。

マザー『リインフォースの新しい体は創造主によって造られた“神造機人”です。特殊な細胞で出来ているので、人間と同じ構造になっています』

マモル「確かに、目立つところはないね」

マザー『ステータスはマモルやアキラと同じですが、違う点は1つあります』

リイン「違う点？ それは何なのでしょう？」

マザー『霊体化が可能でユニゾン出来ます』

アキラ「ユニゾンって何？」

リイン「アキラ。ユニゾンとは融合してステータスを強化させる方法の事です」

アキラ「つまり、貴女は私やマモルと融合出来るって事かな？」

リイン「はい」

マザー『マモルとアキラは4月から川神学園に通う予定ですが、リインフォースも編入しませんか？』

マモ・アキ・リイ「え？」

思っていなかった発言で3人は驚いた。

マザー『2年間、1人だけ別なのは寂しくありませんか？』

リン「・・・そうですね。正直言って学校に興味があります」

マザー『それで返答は如何に？』

リン「はい。編入を志望します」

マザー『了解しました。創造主を通して手続きをしますので、月末にある編入試験を頑張って下さいね』

マモル「うーん・・・あと1週間も無いから、大丈夫かなあ？」

リン「マモル。私はマザーの中に居た時、地球全般の知識を貰いましたから試験は大丈夫ですよ」

アキラ「そうなんだ・・・ずるい気もするけど」

マザー『左端の机にあるダンボール箱はリンフォースの物が入っていますので忘れずに持って帰って下さいね』

リン「はい。此处で中身を確認しても良いですか？」

マザー『構いません。どうぞ』

リンフォースは部屋の左端へ移動してダンボール箱を開ける。中身は身元証明書と通帳（200万円）とハンコ。最後に夜天の魔導書が入っていた。

リン（・・・魔力を感じない。唯の本になっているようだな）

マザー『勝手ながら貴女のフルネームは“八神リインフォース”と決めました』

リイン「え？」

自分の苗字が一代前の主と同じでリインフォースは驚いてしまった。

マモル「どうして、苗字が八神に？」

マザー『夜天の魔導書の履歴を確認して一代前の主である八神はやてから苗字を付けました。地球日本の戸籍では近い親戚扱いになっています』

リイン「そう・・・ですか。ありがとうございます」

マモル（八神はやて・・・此処の世元にもはやては存在していたのか・もしかしたら、葵屋のなのもいるのかな）

マモルは遠い目で考えていた。前いた世元の八神はやてや高町なのはマモルの幼馴染である。勿論、魔法との関わりは無い。

アキラ「マモル？」

マモル「ん。ああ、幼馴染のはやてやなのは事を思い出してね。此処の世元では僕の事を知らない余所の人だけだ」

アキラ（此処の世元にも、裕奈や亜子やまき絵が麻帆良にいるのかな）

アキラ「友達と同じ人でも、自分の事を知らないと寂しいよね」

マモル「・・・だけど、会えたら友達になればいいと思うよ。やり直す感じで」

アキラ「うん、そうだね」

マザー『エデンの住人が3人になった事だし、リーダーを決めませんか？』

マモル「リーダーですか・・・うん」

アキラ「それならマモルが良いな」

マモル「どうして、僕を？」

アキラ「うん、ほとんどマモルが進めていて頼りになるからだよ」

リイン「そうですね。私もマモルを推薦します」

マモル「そんなに評価されているなんて、照れるなあ」

マザー『リーダーはマモルでいいですね？』

マモル「はい」

という事でマモルはエデンチームのリーダーになった。

マザー『話は以上です。お疲れ様でした』

マモル「もうすぐ昼になるし、家に帰ろう」

リイン「どんな家なのか楽しみです」

アキラ「え？ マザーから聞いていないの？」

リイン「はい。お楽しみにと言われて、1つも説明されていません」

アキラ「そ、そうなんだ・・・」

マモル達は管理塔を後にして我が家へ向かった。

「エデン マモルの家（マモルがリーダーになったので変更）」

家に着いたら、リインフォースに各部屋を案内した。

リイン「露天風呂もあって、豪華ですね。自分の部屋が2つもあるから驚きました」

マモル「気に入ってもらえて、何よりだよ」

アキラ「私とマモルは昼食の準備をするからリビングで待っていてね」

リイン「いえ、私も手伝います」

マモル「じゃあ、一緒に厨房へ行こう」

マモル達は厨房へ移動した。

アキラ「予備だけど、貴女のエプロンだよ」

リイン「ありがとうございます」

その後、3人で仲良く料理をする。数十分後、昼食が出来た。

マモ・アキ・リイ「いただきます！」

昼食中・・・

マモル「リインフォース。名前が長いからリインと呼んで良いかな？」

リイン「ええ、呼び易いほうで構いませんよ」

アキラ「私もリインと呼ばせてもらっね」

マモル「リイン。エデンの説明を受けてどうだった？」

リイン「はい。驚きが止まりませんでしたね。ただ・・・神様が本当に居た事実で1番驚きました」

アキラ「あはは・・・私も同じ反応だったよ」

マモル「確かめたい事があるけど、一代前の主の八神さんは海鳴市に住んでいますか？」

リイン「はい。そうです。貴方ははやての事を知っているのですか？」

マモル「あっちの八神さんは僕の幼馴染なんだ」

リイン「あっち？ ああ、マモルとアキラは平行世界・・別の世元から来たのですね。マザーから聞きました」

アキラ「編入試験が終わったら休みの日、八神さんに会う為に海鳴市へ行こうよ。リインが生きていると分かったら喜んで安心すると思うし」

マモル「あ、それは僕も賛成！」

リイン「マモル、アキラ・・ありがとうございます」

マモル「予定として、2月28日は編入試験を受けた後、ミカサで宿泊。次の日は海鳴市へ行く。これで良いかな？」

アキ・リイ「うん」

そして、楽しく話をしながら昼食を食べた。

マモ・アキ・リイ「ごちそうさま！」

その後、3人で仲良く後片付けをした。午後からはエデンの色んな所を回ったり、エデンショップで買い物をしたりして楽しく過ごした。

余談だが、今日から毎晩、アキラはリインフォースと2人で露天風呂

呂に入るようになった。女同士での話もあり、入浴時間が延びてしまった。

第9話 新生リインフォース（後書き）

次回はリインフォースが加わったエデン生活の話になります。
ではまた！

第10話 マモル達のエデン生活

（2月23日（月））

「エデン マモルの家」

朝食を作る為に厨房へ向かったアキラとリインフォースは2階廊下で鉢合わせした。

アキラ「あ、リイン。おはよう」

リイン「おはようございます。アキラ」

アキラ「起きるのが早いね。よく眠れた？」

リイン「はい。何年前か覚えていませんが、久しぶりにベッドで眠れたので目覚めパツチリです」

リイン（あのベッドはフカフカして寝心地良かったな。また寝たい誘惑に負けそうだ）

アキラ「そうなんだ・・・良かったね」

リイン「マモルはまだ部屋に居るようですね。どうしますか？」

アキラ「もうすぐ起きると思うから、先に厨房へ行こう」

リイン「分かりました」

アキラとリインフォースは厨房へ向かった。その2人は好きな人に
尽くしたい性格の為、家事全般の主導権を握っている。故にマモル
より早く起きて頑張っている。

厨房で料理しているとマモルが入って来た。

マモル「アキラ。リイン。おはよう」

アキラ「あ、マモル。おはよう」

リイン「おはようございます。良い目覚めですね」

マモル「アキラ。僕は何をすれば良いかな？」

アキラ「もうすぐ出来るから、皿や茶碗をお願い！」

マモル「分かった」

マモルは返事をして料理の手伝いに加わった。

数分後・・・

朝食が出来上がって食堂へ運ぶ。それが終わった後、テーブル席に
腰を下ろした。4席囲いのテーブルで南席はアキラ、東席はマモル、
北席はリインフォースという配置になっている。

マモル達「いただきます！」

食事中・・・

リン「修行で、どんな事をしていますか？」

アキラ「前半は基礎鍛錬で、人力車引きと雲梯をしているよ」

マモル「後半は“飛翔術”という飛行訓練や魔法と同じ“唱奇術”の練習をしているんだ」

リン「実戦訓練はしないのですか？」

マモル「うん。基礎を固めて術技をある程度身に付けてからと教官に言われたので、実戦訓練はまだしていない」

リン「教官もいるのですか？」

アキラ「指導してくれる実物ホログラムだよ。私とマモルは元々、一般人で戦い方を知らないからマザーにお願いしたの」

リン「成る程。理解しました」

楽しく話をしながら朝食を食べた。

マモル達「ごちそうさま！」

アキラは片付けと皿洗いをして、リンフォースは厨房や食堂の清掃をする。マモルは少し手伝った後、模試で必要な勉強用具を取りに行った。

リン「今、掃除が終わりました。アキラは食器を棚に戻している所ですね。手伝いましょうか？」

アキラ「手伝いはいいよ。すぐに終わるから」

リイン「そうですか・・・お疲れ様です」

マモル「2人共、お疲れ様。模試の準備が出来たよ」

家事が終わった後、アキラとリインフォースはエプロンを外して食堂に入る。マモル達はテーブル席に腰を下ろして模試を始めた。

数時間後・・・

マモル「今回も全教科満点と・・・リインはどうだった？」

リイン「私も全教科満点でした。どんな問題も簡単ですね」

アキラ「何度も思うけど、余裕で自分が怖い」

マモル「それは否定出来ないね・・・」

アキラとリインフォースはエプロンを付けて厨房に入る。マモルは勉強用具を片付けた後、料理の手伝いに加わった。

数十分後・・・

昼食が出来上がり食堂へ運ぶ。椅子に座る場所は朝食の時と同じである。

マモル達「いただきます！」

食事中・・・

リイン「学校生活はどんな感じでしょうか？」

マモル「学生として勉強するのが普段だけど、友達と楽しく遊んだり話をしたりするんだ」

アキラ「他に部活動があるし、体育祭や学園祭などの楽しいイベントがあるよ」

リイン「色々あるんですね」

楽しく話しながら昼食を食べた。

マモル達「ごちそうさま！」

アキラとリインフォースは食器をまとめて厨房へ入る。マモルは食堂の掃除をした。

数十分後・・・

マモル「各自、修行の準備をしてモノレールの湖東駅で集合しよう。良いかな？」

アキ・リイ「はい」

マモル達は自分の部屋に戻って修行の準備をする。そして湖東駅で集合し、湖南駅までモノレールに乗って訓練場へ向かった。

Ⅱ エデン 訓練場 Ⅱ

到着したら男女別に更衣室へ行く。男の着替えは早いのでマモルは、ひと足先にドームへ向かった。

マモル「教官。こんにちは。今日も宜しく願いします」

教官「こんにちは。マモル」

両方互いに挨拶をする。暫くしてアキラとリインフォースがやって来た。

教官「こんにちは。アキラ。初めまして。リインフォース」

アキラ「はい。今日も宜しく願いします」

リイン「初めまして。ご指導宜しくお願いします」

アキラとリインフォースも教官に挨拶をする。その後、ストレッチや準備運動を済ませた。

教官「始めに人力車引きといきましょうか」

ソリ付き人力車3台とコースが出現する。リインフォースが加わったのでコースが2列から3列になっている。

リイン「その人力車。車輪が付いていませんね」

教官「引きにくいからこそ、足腰が強くなります。それと、私は貴女が引く人力車に乗りますので頑張ってください」

ライン「は、はあ・・・分かりました」

教官はラインフォースが引く人力車に乗り込む。マモル達は位置に着いた。

教官「スタート！」

合図と共にマモル達は走り出した。

1時間後・・・

教官「次は雲梯です」

雲梯の塔が出現する。今回も塔が2本から3本に増えている。

ライン「なっ!？」

凄い光景でラインフォースは驚いて固まってしまった。

マモル「ラインは、やはり驚いているね」

アキラ「初めて見るから無理も無いと思う。私達もそうだったし」

マモル達は位置に着いて、雲梯に掴まり塔を登り始めた。

1時間後・・・

教官「基礎鍛錬お疲れ様。15分休憩です」

マモル「ふう」

アキラ「リイン。大丈夫？」

リイン「手が少し痛いですが、すぐに治りますので大丈夫です」

教官「これを飲んで元気を取り戻して下さいね」

教官はマモル達に毎度お馴染みのスポーツドリンクを差し出す。

マモル達「ありがとうございます！」

マモル達は、お礼を言った後スポーツドリンクを飲んだ。

15分後・・・

教官「マモルとアキラは飛行訓練を行って下さい。課題は高速で方向転換出来るようにする事」

マモ・アキ「はい！」

マモルとアキラは空を飛んでいき、飛行訓練を始めた。

教官「リインフォースは始めに、魔力のコントロールが出来るように訓練をしてもらいます」

リイン「魔力のコントロールですか・・・あれはレアスキル扱いなので、私にも出来るのでしょうか？」

教官「ええ、貴女の新しい体は幅が広い資質を持っていますので習得可能ですよ。マモルとアキラは既に習得しています」

リン「分かりました。習得方法をお願いします」

教官「瞑想を行い、体内にある魔力を感じ取って下さい」

リンフォースは教官の指示に従い、瞑想に入った。

30分後・・・

リン「教官。コツを掴めてきました。それと、聞きたい事があるのですが」

教官「魔力と別の“何か”を感じたのでしょうか？」

リン「はい。その通りです」

教官「あれは体内エネルギーの1つ。魔力と相反する“気力”です。補足として貴女とマモルとアキラはリンカーコアが2つあります」

リン「魔力を生み出すものと、もう1つは気力を生み出すものですね？」

教官「正解です。今後、魔力と気力のコントロールの訓練を行って下さい」

リン「分かりました」

30分後・・・

教官【マモル。アキラ。降りて下さい】

教官は念話でマモルとアキラを呼び出す。リインフォースは瞑想中。

マモ・アキ【はい。教官】

マモルとアキラは教官の元へ降りた。

教官「今から、唱奇術（魔法）の練習をします」

マモル「先週はバリアを張る“プロテクション”と射撃を跳ね返す壁を張る“リフレクトシールド”の練習だったけど、今回はどんな唱奇術ですか？」

教官「今回は捕縛関連です。光の輪で動きを封じる“リングバインド”と隔壁で閉じ込める“クリスタルケージ”を習得してもらいます」

アキラ「それは簡単に相手を怪我させずに押さえる事が可能で便利ですね」

教官「ええ、貴方達は人を殺さない“不殺”の意思が固い。これから先、捕縛の唱奇術を使うのが多くなるでしょうね・・・」

教官はマモルとアキラに捕縛の唱奇術の使用方法を教えた後、此处から離れた場所にマネキンみたいな歩行ロボットが沢山出現する。

教官「練習内容は、あのロボットが此处に近付かないように捕縛の唱奇術で止める事。良いですね？」

マモ・アキ「はいっ！」

教官「それでは・・・スタート！」

練習開始の合図が響き、対象のロボットが2体ずつ動き出す。

マモル「リングバインド！」

黄色の光の輪がロボットを縛り付ける。

アキラ「リングバインド！」

水色の光の輪がロボットを縛り付ける。

教官「ふむ、上手く使えているようですね」

縛られた2体のロボットは消えた後、後方に控えていたロボットが2体動き出す。全てのロボットが無くなるまで練習が続いた。

1時間後・・・

マモルとアキラは練習が終わった後、リインフォースの元へ向かった。

リイン「練習お疲れ様です。マモル。アキラ」

マモル「うん、リインはどうだった？」

リイン「魔力と気力のコントロールは出来るようになりました。後は訓練を重ねるだけですな」

アキラ「え、もう出来たの？ 私達は1ヶ月掛かったのに・・・」

教官「リインフォースは経験が豊富なので、センスが良いようです」

マモル「成る程」

教官「今日の修行はここまで。クールダウンを済ませて下さい」

マモル達「はい！」

マモル達は軽くランニングしてクールダウンを済ませる。

10分後・・・

教官「また明日、会いましょう。今日はお疲れ様でした」

マモル達「はい。今日はありがとうございました！」

マモル達は教官と別れた後、更衣室へ行き私服に着替える。訓練場のエントランスで集合し、湖南駅からモノレールで家に帰った。

「エデン マモルの家」

家に着いたら荷物を洗濯場に置いて厨房へ行き夕食の準備をする。

アキラ「私は肉じゃがとサラダを作るから、リインは味噌汁をお願い！」

リイン「はい。私に任せて下さい」

マモル「僕はご飯を炊いた後、デザートフルーツポンチを作るよ」

マモル達はメニューを決め、料理に取り掛かった。

数十分後・・・

夕食が完成して食堂のテーブル上に並べた後、席に着いた。位置は朝食・昼食のと同じ。

マモル達「いただきます！」

食事中・・・

リイン「味噌汁の味はどうでしょうか？」

マモル「味付けが良く出来ていて美味しいよ！」

アキラ「うん、初めて作ったと思えないほど、美味しい！」

リイン「それは良かったです。ありがとう」

マモル「そういえば、夜天の魔導書のヴォルケンリッターは何人いたのかな？」

リイン「ヴォルケンリッターですか・・・剣の騎士シグナム、鉄槌の騎士ヴィータ、湖の騎士シャマル、盾の守護獣ザフィーラ、合わせて4人います」

アキラ「1つ家族なんだね。1人かと思ってた」

マモル「その人数なら、八神さんは寂しくないね」

リイン「そうですね。今は幸せに暮らしているといいのですが・・・」
楽しく話をしながら夕食を食べた。

マモル達「ごちそうさま！」

食器をまとめて厨房へ運ぶ。

マモル「僕は風呂の準備をして来るよ」

アキラ「うん、お願いね」

リイン「後で、手伝いましょうか？」

マモル「僕1人で大丈夫だから、手伝いは要らないよ」

リイン「そうですか・・・お願いします」

アキラとリインフォースは皿洗いと厨房・食堂の掃除をする。マモルはお風呂掃除に行った。

数十分後・・・

マモル「アキラ。リイン。お疲れ様。風呂の準備が出来たから先に入っておいで」

アキラ「で、でも・・・マモルが準備してくれたから先に入っても・・・」

」

リイン「アキラの言う通りですよ。気を遣わなくても・・・」

マモル「いえいえ。何度も言うけど、レディファーストだからね」

アキラとリインフォースは考えて顔を見合わせた後、マモルの方を見る。

アキラ「本当に・・・良いの？」

リイン「私達の入浴は長いです。それでも構いませんか？」

マモル「うん！ 僕は頑固で、ごめんね」

アキラ「あはは・・・それじゃ、言葉に甘えて先に入らせてもらうね」

リイン「ありがとう」

リイン（それがマモルの優しさなのかも知れませんか）

アキラとリインフォースはマモルに笑顔で返事をして、リビングを後にした。

マモル「・・・・・・・・」

マモル（それを自己満足っていうのかな・・・いや、気にするのは止めよう）

こつう受験を兼ねた日程は今週でお終い。3月から川神学園始業式まで、新たな1日のスケジュールに変わるだろう。それは午前も午後も修行になるのだが・・・

第10話 マモル達のエデン生活（後書き）

次回は海鳴市観光の話になります。

はたしてリインフォースは八神はやて達に会えるのでしょうか？
楽しみに。

マモル達の魔力光・気力光の色は以下の通りです。

マモルは黄色 アキラは水色 リインフォースは桃色

ではまた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4861x/>

真剣で神の協力者になった二人

2011年11月27日10時47分発行